

西ヶ原

長野県上伊那郡中川村西ヶ原遺跡

緊急発掘調査報告書

1979

中川村教育委員会

西ヶ原

長野県上伊那郡中川村西ヶ原遺跡

緊急発掘調査報告書

1979

中川村教育委員会



1



2



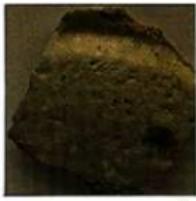
3



4



5



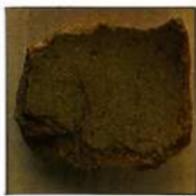
6



7



8



9



10



11



12



13



14



15



16



17



18



19



20



21



22



23



24



25



26



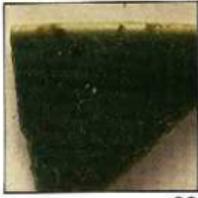
27



28



29



30



31



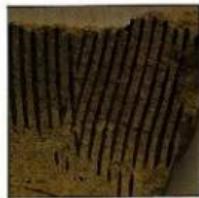
32



33



34



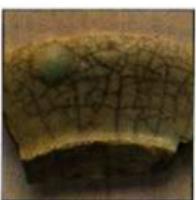
35



36



37



38



39



40



41



42



43



44



45



46



47



48

口絵説明

口絵	図版	分類No.	合編No.	産地	器種	時代	備考
口絵(一)	1	140	NA 667	中國 戸	青天	直目鉢	不詳
"	2	215	NA 表揚	瀬戸	灰天	直目鉢	室町
"	3	217	"	"	灰	輪鉢	"
"	4	219	NA 1066	"	天	輪鉢	"
"	5	216	" 23	"	灰	輪鉢	桃山
"	6	149	" 889	美濃 戸	黒	輪鉢	"
"	7	151	" 326	福戸	万十	むし鉢	江戸
"	8	154	" 1098	"	すり	輪鉢	"
"	9	218	NA 表	"	灰	輪鉢	"
"	10	170	"	"	灰	輪鉢	"
"	11	167	NA 139	不詳	不	直目鉢	"
"	12	158	" 25	瀬戸	不	直目鉢	末期 磁製品
口絵(二)	13	201	NB 表	美濃 戸	須	直	平安
"	14	203	NB 211	"	灰	直	"
"	15	202	NB 表	"	"	直	"
"	16	205	"	"	"	直	食
"	17	174	NB 223	瀬戸	黒	子	"
"	18	182	" 175	"	黒	子	江戸
"	19	187	" 376	"	すり	輪鉢	室町(前期)
"	20	209	NB 表	"	鉄	輪鉢	室町
"	21	287	"	"	鉄	輪鉢	"
"	22	204	"	"	鉄	輪鉢	"
"	23	208	"	"	鉄	輪鉢	"
"	24	206	"	"	鉄	輪鉢	"
口絵(三)	25	178	NB 110	"	こ	ね	直目
"	26	179	" 370	美濃 戸	天	直	室町(末期)
"	27	181	" 371	瀬戸	黒	目	桃山
"	28	172	" 92	"	鉢	直	室町 戸
"	29	173	" 93	"	青	直	室町 戸
"	30	214	NC 表	中國 戸	"	直	南北朝
"	31	52	分中田島62	瀬戸	瓶子あるいは四耳壺	直	軌道下から発見
"	32	55	" 55	"	瓶(こね鉢)	直	瀬戸町
"	33	59	" 59	"	すり	直	室町
"	34	26	" 37	"	仏	花	尊式仏花瓶のラッパ口
"	35	16	" 42	"	す	り	江戸 戸
"	36	32	" 2	"	不	直	灰 鉢
口絵(四)	37	35	" 5	"	す	直	"

口 括(四)	回数	分類名	台 機 号	産 地	器 種	時 代	備 考
口括(四)	38	51	分中田島21	潮 戸	灯 明 盒	江 戸	灰 鞍
×	39	1	×	22 有 田	青 鏽	×	
×	40	67	×	67 潮 戸	鉢	×	兵 須
×	41	122	分牧ヶ原A	~	扇 子 並の面	錦 東	
×	42	109	~	35 ~	す り 鉢	室町(末) ~	桃 山
×	43	95	~	21 ~	天 目	桃 山	
×	44	89	~	15 ~	ど びん の 口	江 戸	
×	45	129	~	55 ~	大 鉢	~	
×	46	113	~	39 ~	白 輪 瓶	~	
×	47	108	~	34 中 国	青 鏽 磁	不 江 戸	
~	48	79	~	5 潮 戸 仏 飯 箔	青 鏽	江 戸	

序

西ヶ原遺跡は国鉄飯田線伊那田島駅の南西、天竜川右岸段丘上に分布する遺跡であります。本調査報告書は第2次農業構造改善事業に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘による記録保存の報告であります。

昭和53年6月から8月にかけて発掘作業が行なわれましたが、広範な地域のために、事前に行った全地域にわたる分布調査に基づいて、三ヶ所をA、B、C地区と命名し発掘調査の対象としました。

この発掘で出土した遺物は、縄文、弥生時代の土器片、古墳時代の土師器平安時代の灰釉陶器、室町時代を前後する陶器等が多く、石製品、鐵等を含めると2,000点以上になり、これと共に弥生、平安時代の住居跡が確認されています。

広々とした圃場の中からこうした得がたい埋蔵文化財を数多く発掘し、永久に記録保存のできたことは非常にありがたいことです。

なお、出土した陶器類に関しては、瀬戸市歴史民俗資料館長宮石宗弘先生に鑑定と御指導をいただき、また、焼石炉とその周辺に発見された木炭については東京学習院大学にて木炭による年代測定の結果、約4,400年前という絶対年代が判明したことは極めて貴重なものであります。

この調査発掘にあたり、長野県教育委員会並びに上伊那地方事務所の御指導をいただいたり、調査団長友野良一先生をはじめ、調査員諸氏の御努力と地元の皆様の御協力により、無事発掘調査を終了することができました。

ここに関係の方々に対して、心から感謝申し上げます。

昭和54年2月28日

中川村教育長 松村 正文

例　　言

1. 本報告書は、西ヶ原地区第2次農業構造改善事業に掛る長野県上伊那郡中川村西ヶ原遺跡の緊急発掘調査報告である。
2. 発掘調査は、中川村の委託により、中川村教育委員会が調査団を編成し、予備調査を含めて昭和53年3月20日から8月11日まで行ない、報告書作成作業は昭和54年2月22日まで行なった。
3. 本報告書は、契約期間内にまとめなければならず、且つ調査員は他市町村でおこなわれている調査発掘を担当しているため、調査結果の綿密な検討の時間が十分とれなかったので、遺構、遺物についてはできるだけ図示することに努めた。
4. 資料及び本文執筆は下記の者があたったが、最終責任者は編集者にある。

繩文、弥生、平安時代各遺構	友野 良一
出土遺物の実測	和田 武夫
木炭年代分析	木越 邦彦
出土陶磁器鑑定	宮石 宗弘
遺構、遺物写真	友野 良一
本文執筆	友野 良一
出土遺物復元	和田 武夫
5. 遺構実測図は原則として $\frac{1}{60}$ の縮尺に合わせて掲載したが、その他の遺構については各々の縮尺に合わせた。
6. 遺物写真については、可能なかぎり実物に近いように掲載し、陶磁器については、質感、釉調をそこなわぬようカラーで掲載した。
7. 表に掲載した遺物番号等は、台帳番号と同一のものを使用した。
8. 発掘中の資料の一部として8mmによる撮影をおこない、調査過程を記録に収めた。なお、出土遺物及び実測図、写真等は中川村福祉センターに保管してある。

目 次

口絵（1～4）, 表……西ヶ原遺跡及び周辺の遺跡出土陶磁器	
序……………	中川村教育長 松 村 正 文
第Ⅰ章 調査の経緯……………	1
第1節 調査に至るまで……………	1
第2節 調査の組織……………	1
第3節 調査の経過……………	2
第Ⅱ章 遺跡の環境……………	5
第1節 遺跡の位置……………	5
第2節 地形及び地質……………	7
第3節 層序……………	8
第4節 周辺の遺跡と歴史的環境……………	9
第Ⅲ章 遺構及び遺物……………	12
第1節 遺構の概要……………	12
第2節 繩文時代の遺構と遺物……………	15
第3節 弥生時代の遺構と遺物……………	19
第4節 平安時代の遺構と遺物……………	24
第5節 土壙及び柱穴址……………	37
第6節 その他の遺構・遺物……………	43
第Ⅳ章 西ヶ原遺跡及び周辺の遺物……………	46

資 料 西ヶ原遺跡周辺の遺跡出土陶磁器一覧表

図 版

ま と め ……………… 調査団長 友野良一

〔挿図目次〕

- | | |
|----------------------|----------------------|
| 第1図 位置図 | 第19図 土壤、柱穴址配置図 (I) |
| 〃2〃 遺跡付近の地形 | 〃20〃 土壤、柱穴址断面図 (II) |
| 〃3〃 西ヶ原遺跡の層序 | 〃21〃 土壤、柱穴址配置図 (II) |
| 〃4〃 周辺の遺跡分布 | 〃22〃 土壤、柱穴址断面図 (III) |
| 〃5〃 A地区構造配置図 | 〃23〃 土壤、柱穴址配置図 (III) |
| 〃6〃 焼石炉上部木炭分布図 | 〃24〃 土壤、柱穴址断面図 (IV) |
| 〃7〃 A地区1号焼石炉 | 〃25〃 土壤、柱穴址配置図 (IV) |
| 〃8〃 A地区1号住居址 | 〃26〃 A地区1、2号土壤 |
| 〃9〃 A地区1号住居址遺物分布図 | 〃27〃 B地区1号集石土壤 |
| 〃10〃 B地区構造配置図 | 〃28〃 C地区構造配置図 |
| 〃11〃 B地区1号住居址 | 〃29〃 A地区木炭分布調査地区出土土器 |
| 〃12〃 カマド断面図 | 〃30〃 A地区出土縄文土器 |
| 〃13〃 B地区1号住居址遺跡分布図 | 〃31〃 西ヶ原、周辺の遺跡分布調査土器 |
| 〃14〃 B地区1号ロームマウンド | 〃32〃 A・B地区1号住居址出土土器 |
| 〃15〃 B地区構造配置図 | 〃33〃 B地区1号住居址出土土器 |
| 〃16〃 B地区遺物分布図(土師) | 〃34〃 A・B地区出土石器 (A) |
| 〃17〃 B地区遺物分布図(石器・陶器) | 〃35〃 A・B地区出土石器 (B) |
| 〃18〃 土壤、柱穴址断面図 (I) | 〃36〃 周辺の遺跡出土石器 |

〔図版目次〕

- | |
|--------------------------|
| 図版1 遺跡遠景(東側より)・同遠景(西側より) |
| 〃2 木炭調査地区に現れた焼石(真上、南側) |
| 〃3 木炭分布調査状況・焼石炉上部・同底部 |
| 〃4 A地区1号住居址・同柱穴(P1~4) |
| 〃5 埋甕炉・土器・石器出土状況、B地区全景 |
| 〃6 B地区1号住居址・同カマド |
| 〃7 カマド断面図・土器出土状況、柱穴址(部分) |
| 〃8 A・B地区1号住居址出土土器 |
| 〃9 B地区1号住居址出土土器 |
| 〃10 西ヶ原、周辺の遺跡出土石器 (I) |
| 〃11 西ヶ原、周辺の遺跡出土石器 (II) |
| 〃12 B地区1号ロームマウンド・1号集石土壤 |
| 〃13 A地区1、2号土壤、C地区排水溝 |
| 〃14 発掘風景 (I) |
| 〃15 発掘風景 (II) |

第Ⅰ章 調査の経緯

第1節 調査に至るまで

中川村の圃場整備事業は、基本構想の策定により昭和47年農業振興地域整備計画に基き審議され、実施の段階に至った。

昭和53年西ヶ原地区の40ヘクタールが第二次構造改善事業により施工されるに伴い、埋蔵文化財発掘調査による遺跡調査がおこなわれた。中川村には数多くの遺跡群が全地域に分布しており、どの地区にも埋蔵された文化財が点在して、各事業は一区画30アール平均に造成されるため、大部分の遺構その他の貴重な文化財が壊滅されること必至である。事業に伴う遺跡調査こそ、古代からの埋れた文化遺産保護的重要性を深く感ずるものである。

本村における今後の圃場整備事業は、前沢洞地区の団体営土地改良事業、片桐北部の県営土地改良事業、片桐地区農免道路事業等で梨ノ木遺跡、溝林遺跡等が調査対象にされている。西ヶ原遺跡発掘調査は面積1400m²、事業費700万円で中川村遺跡調査会へ委託をして事業を行うことし、村長と会長との間に「西ヶ原遺跡発掘調査委託契約書」を取り交わして遺跡調査を開始した。

第2節 調査の組織

中川村遺跡調査会

会長	松村正文	中川村教育長
理事	松村安雄	中川村教育委員長
"	平沢善吉	文化財調査委員
"	松下辰男	"
"	富永精一	教育委員
"	杉沢要	"
監事	松崎伝重	中川村会計監査委員
"	市瀬知喜	"
幹事	横沢薰	教育次長
"	地田久美子	教育委員会主事
"	宮下健彦	教育委員会書記

西ヶ原遺跡調査団

団長	友野良一	日本考古学协会会员
調査員	和田武夫	長野県考古学会会员
"	田畠辰雄	"

調査員 丸山弥生 上伊那考古学会会員
赤羽義洋 長野県考古学会会員

第3節 調査の経過

月 日	日 緯
3. 20	午前中、発掘予定A地区に於て、関係者団結式をおこない、午後は調査団で発掘計画をねる。
~ 4. 1	この期間予備調査を少しづつ進める。
~ 6. 6	休み
7	A地区にグリッドを設定し、発掘調査にかかる。H～Nのグリッドの奇数番のグリッドの調査と、A～Hの奇数番のグリッドの試掘調査。B地区の表面採集を行う。
21	A地区的グリッド発掘調査及び、C地区的試掘調査をおこなう。A地区に於ては、グリッド設定地区の西方に落ち込み1ヶ所と、土師3点を検出。また、グリッド設定ヶ所に2ヶ所の落ち込みを発見した。C地区に於ては、中世～近世にかけてのもとのと思われる排水溝2本を検出した。
	B地区の表面採集を進める。
22	B地区に調査を移し、トレントを入れて調査をおこなう。集石及び、積石を検出する。
7. 1	B地区にグリッドを設定し、本調査をおこなう。遺物のドットマップ、地層調査、写真撮影、8ミリ撮影をおこなう。
2	休み
3	集石土壤と、積石の横に落ち込みを確認し、西ヶ原B地区1号住居址とする。 住居址の調査、グリッドから検出された土壤、柱穴の調査をおこなう。
8. 1	1号住居址の調査及び、B地区に検出された、土壤、柱穴址等の調査、写真撮影を完了する。
2	A地区的木炭分布調査の準備。
3	A地区的木炭分布調査を進める。合わせて、西方の落ち込み場所にグリッドを設定し発掘を進める。
5	落ち込みの下に住居址を検出し、A地区1号住居址とする。
7	木炭分布調査地区に検出された、焼石を写真撮影するためのヤグラを組む。写真撮影。

月 日	日 誌
8. 8	焼石の下に落ち込みを検出し、発掘調査をおこなう。落ち込みから木炭、焼石を検出し、焼石炉とする。 A地区 1号焼石炉、1、2号土壤、1号住居址の調査
12	発掘作業を中止し、地形測量、地質調査にとりかかる。合わせて、遺物洗滌作業、陶磁器の分類を進める。
10. 12	現場に於ける作業を終了する。
20	出土遺物の分類等整理作業を開始する。
1. 19	遺物作業整理を終了し、報告書刊行準備にかかる。
2. 28	報告書刊行作業を終了し、遺跡調査のすべてを終了する。

長期間の発掘に御理解と御協力下さった、地元関係者、発掘参加者の方々に心より感謝の意を申し上げる次第です。

発掘調査参加者(順不同)

橋沢 定子	小池モモ江	米山 節子	近藤 寿枝	大場 廉子	宮下 秀夫
木下 齊	前原けさ子	横田 愛子	下平みち子	中原 幸子	大原 礼子
片桐 愛子	大場 かい	北村 忠	大場とみえ	小林 好彦	小原寿司夫
千葉 豊	北条 芳隆	竹村 浩文	酒井 後彦	宮沢 功	斎藤みき子
前沢 卓也	滝沢富士夫	松村 元文	佐々木 等	片桐 敏和	菅沼 秀基
米山 横	今井さく子	斎藤 隆敏	中山ゆり子	宮崎 尚司	高田 晃人
中島 元博	松下 節子	宮沢ゆき子	松沢 弘子	新井甲子代	白澤 文雄
下平 元謙	宮下 幸子	宮下 信彦	戸田 こう	有賀あさよ	小池 美保
中森 千吉	片桐 芳克	橋沢 一也	宮下 早苗	米山 広子	石原 徹
白鳥あき子	目黒 秀敏	平沢八千代	富永 幸宏	鶴岡 琢臣	森本 昭男
木下 恵彦	中 法彦	小田切房子	雨沢 勝範	林 美弥子	保科 徳子
沢村 俊子	清水 匡文	石原 勉	和田ふさよ	宮崎 育王	

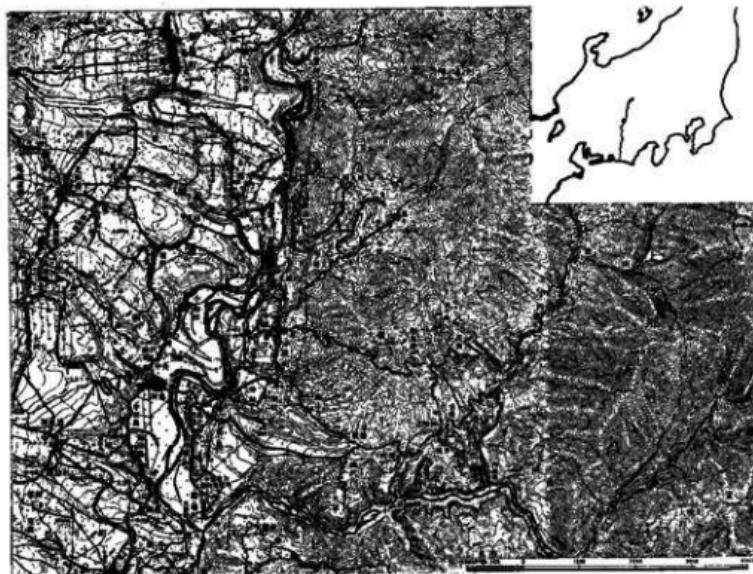


遺跡航空写真（遺跡附近）

第II章 遺跡の環境

第1節 遺跡の位置

西ヶ原遺跡の地理的位置は、東経137度48分25秒、北緯35度14分7秒に位置し、長野県上伊那郡中川村西ヶ原地籍にある。遺跡に至るには、国鉄飯田線伊那田島駅を下車し、南に500m、国道153号線バイパスより西方に1200m進んだ地点に所在する。遺跡は、中央アルプス山麓に源を発する前沢川と、兼訪湖から流れ出る天竜川の合流する段丘上に位置し、標高612～625mの段丘東端に分布している広々とした段丘上にある。また、段丘東端からは眼下に蛇行する天竜川と段丘崖に発達した南田島、中田島、田島、中央などの部落が望まれ、竜西地区に幾層にも発達した河岸段丘と、遠く南アルプスの山々が望まれる非常に景色の良い所である。



第1図 位置図



第2図 遺跡附近の地形

第2節 地形及び地質

1) 地 形

遺跡の位置する西ヶ原面と、天竜川氾濫原との高低差は120mほどあり、西ヶ原扇状地面は、前沢川と片桐松川の両河川によって、七久保、横前扇状地面と松川町上大島面と切断された形になつており、ここでも、田切地形の特徴をよく表わしている。天竜川氾濫原から西ヶ原面に至るには、四つの段丘面を経なければならない。平部落のある前沢平面を経て、さらに桐山平面、大林平面を経て伊那田島駅下面に至る。厳密には、伊那田島駅上面を西ヶ原面と呼ぶが、駅下面を含めて西ヶ原面と呼ぶ場合があるので、慣例にならえば、三つの面を経ることになる。これら、三つの面は、規模も小さいが、西ヶ原面に近づくにつれて規模が大きくなる。これらの面には、縄文早期から、弥生後期にかけての遺跡の存在が知られている。西ヶ原遺跡は、西ヶ原面の突端に広がっていると考えられるが、縄文中期、弥生後期の遺構が検出されたA地区の南側にあたる大沢洞は、浸食が激しく、現在の洞が形成されたのは、明治以降のことと考えられ、古い時代には、大沢洞を隔てた、富士塚及び富士塚遺跡とは小さな洞で隔っていたものと思われる。また、平安時代の遺構が検出された駅下面是、八幡沢が少しづつ浸食をおこなつておらず、南田島部落から駅下面にのぼるために、八幡沢の南側の急な斜面をのぼらなければならない。

西ヶ原面の成因について考えると、竜西地区にみられる扇状地と同様の成因によると思われるが、木曾山脈の越百山から流れ出る与田切川の形成した扇状地南面にあたるか、あるいは烏帽子岳に源を発する片桐松川の形成した扇状地の北面にあたるものと思われ、前沢川は、その後浸食をはじめ七久保、横前面と西ヶ原面を切断したものと思われるが、詳細は不明である。上片桐から高遠原、七久保、横前には、縄文時代からの遺跡が発見されており、古くから人々が住むには条件の良い所だったと言えよう。

2) 地 質

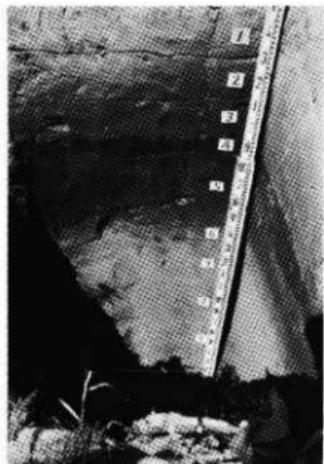
西ヶ原扇状地の基盤は、古期火山灰層が、砂礫層中に入り込んだ砂礫層からなり、その上に、中期、新期ローム層が乗った地層になっている。新期ローム層及び中期ローム層は、大沢洞断崖で観察されるもので、3.7m～4.0mの厚さで堆積されている。「下伊那の地質解説」によれば、西ヶ原における新期ローム層は150cmほどであり、中期ローム層は、220cmほどであると示されている。大沢洞では、古期ローム層と中期ローム層の区別はできない。

砂礫層中に含まれる礫は、直徑10～20cmのものが最も多く、まれに、大型のものも見ることができる。西ヶ原扇状地の基盤は、岩盤より成っていないために、脆く、従って浸食も激しく、大沢洞、八幡沢は豪雨の際土石を下流におし出し、しばしば災害をもたらした。

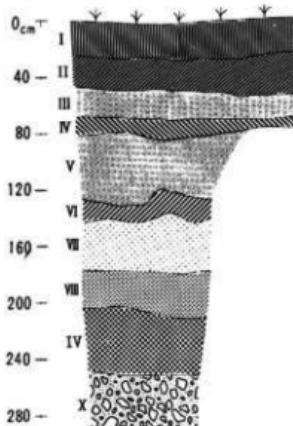
第3節 層序

西ヶ原扇状地面は、緩傾斜面であるが、場所により地層状態が少しづつちがっている。地層調査は、A発掘地区内のM—2グリッドを調査地点に選び調査をおこなった。B、C発掘地区についても同様に調査をおこなう計画であったが時間の関係上別の機会におこなうこととした。

- 第Ⅰ層（耕作層）……地表面から25～30cmの厚さである。
第Ⅱ層（耕作層）……20～25cmの厚さである。
第Ⅲ層（耕作層）……15～20cmの厚さである。
第Ⅳ層…………炭化物、腐植物等を含む黒色土で厚さ10～18cmである。
第Ⅴ層…………ローム粒を含む暗褐色土で厚さ40～45cmである。
第Ⅵ層…………ロームの中に褐色土を含み、厚さ12～20cmである。
第Ⅶ層…………黄褐色を呈するローム層で軟かく厚さ30～40cmである。
第Ⅷ層…………第Ⅶよりやや暗い黄褐色ローム層で軟かく、厚さ30～35cmである。
第Ⅸ層…………第Ⅷ、Ⅸより粘性が強いローム層であり、厚さ300～320cmあると考えられる。この層の下は、10～15cm直径の礫を含む砂礫層が続くと考えられる。



層序写真



第3図 西ヶ原遺跡の層序 (1:40)

第4節 周辺の遺跡と歴史的環境

西ヶ原遺跡の所在する中川村片桐地区は、原始から歴史時代に至るまでの数々の遺跡が確認されている。中川村に確認されている遺跡は37ヶ所を数えるが、片桐地区には19ヶ所に遺跡があり、古墳、城跡を含めると23ヶ所にのぼっている。西ヶ原扇状地面と同じ横前、針ヶ平面には遺跡が集中しており、刈谷原遺跡等重要な遺跡を含んでいる。次に、1段低い段丘面である大林面、牧ヶ原面にも遺跡が多く、縄文前期から平安時代にかけての遺跡が分布する。そして、前沢川氾濫原及び段丘崖下では、古墳時代から中世にかけての遺物が分布する。

これらの遺跡を地形的なまとまりから見たが、本村に於て、調査が実施された遺跡について述べてみよう。

1. 西ヶ原遺跡は今回の発掘調査によって弥生後期住居址1軒、平安時代住居址1軒、その他縄文時代焼石炉、平安時代住穴址等が検出された。
 2. 富士塚遺跡は、縄文中期の遺物、住居址が出土した遺跡であるが、富士塚は調査されていない。
 3. 桐山遺跡は、縄文中期、弥生後期の遺物が発見された。
 4. 大林遺跡は、縄文早期末、山形押型文土器が発見され、本村に於ては最も古い遺跡である。
 5. 六万部古墳は、昭和52年学術発掘がおこなわれ、金銅製柄頭をはじめ、貴重な遺物が出土し、古墳後期における片桐の有力豪族の墳墓と思われる。
 6. 松ノ越遺跡は現在の中川西小学校敷地拡張の際、弥生後期住居址2軒、平安時代堅穴式住居址1軒と、それぞれ遺物が調査確認された。
 7. 五十目遺跡は、縄文中期の遺物が発見された遺跡。
 8. 牧ヶ原遺跡は、牧ヶ原段丘中央部を中心に、弥生後期、土師器等が発見された遺跡。
 9. 針ヶ平遺跡は、縄文中期、弥生後期の遺物が発見された遺跡。
 10. 溝林遺跡は、縄文中期の遺物が発見された遺跡。
 11. 梨ノ木遺跡は、縄文中期の遺物が発見された遺跡。
 12. 刈谷原遺跡は、弥生中期の土器が発掘された遺跡。
- 以上が、西ヶ原周辺の主要な遺跡ではあるが、その他の遺跡として、
13. 中央部落天伯地籍に古墳時代後期のものと思われる、横穴式石室を有する円墳が昭和54年に発見された。前沢川氾濫原に築かれている。
 14. 天伯と同様に、南田島部落保谷沢右岸に古墳が昭和54年に確認されたが、現在は主体部を失い石室に使用した石が残る消滅古墳であり塚本古墳と呼ぶ。
- 南田島から田島部落にかけては、弥生後期、土師等の遺物を採集することができ、塚本古墳の存在から、古くから開拓された地域であると思われる。六万部、天伯、塚本古墳の関係は今後の研究課題である。

東山道「堅雜駅」址について、駅址の地籍にはさまざまな説があるが、中でも、中央部落中

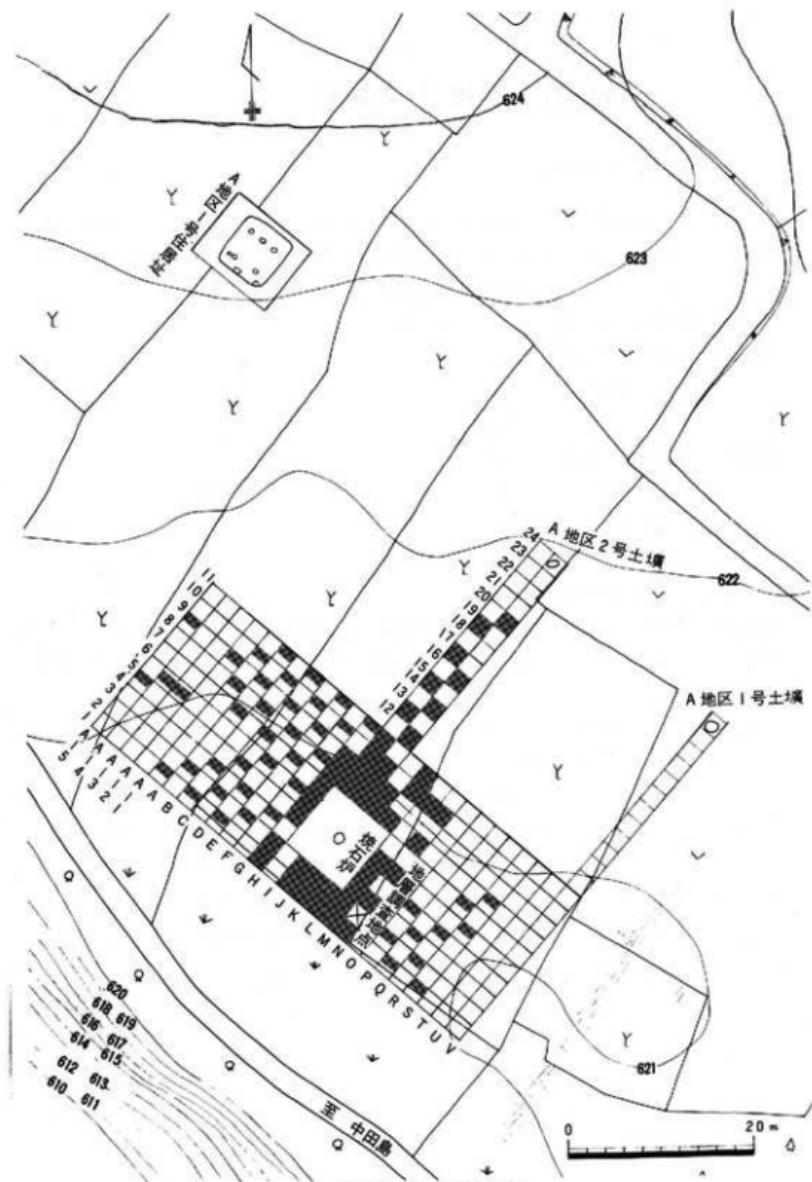
村附近に駅址を想定する説が有力視されている。中央部落中村は、背後に牧ヶ原、横前（古くは横間屋と書く。）という地名のある低、中位段丘を控え、面前に湿田地帯を有することを根拠としている。

歴史時代における遺跡として、次のものがあげられる。

15. 舟山城跡は、南田島から中央部落と渡場部落、さらに、水田地帯を望む段丘の突端部分に位置し、片切氏の居城であったとされる。
16. 古城城跡は、大林遺跡の南側に位置し、現在、土壙によって確認できるが、築城年代、築城主など不明である。



第4図 周辺の遺跡分布
(1 : 6,000)



第5図 A地区構造配置図

第三章 遺構及び遺物

第1節 遺跡の概要

先に記した調査の経過によって調査された広さは、A地区が、試掘調査を含めて東西約70m、南北約20m、面積にして約1,400m²にわたり、B地区が、東西約22m、南北約30m、面積約660m²にわたり、C地区が、1,500m²の土地の試掘調査をおこなった。

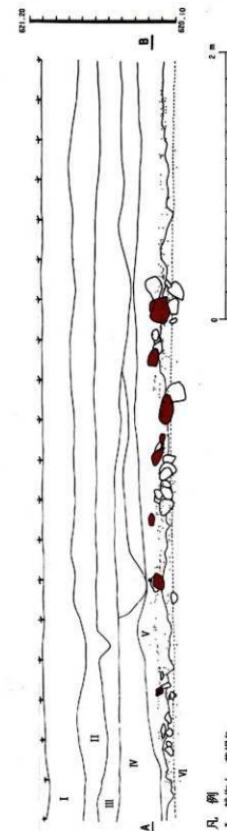
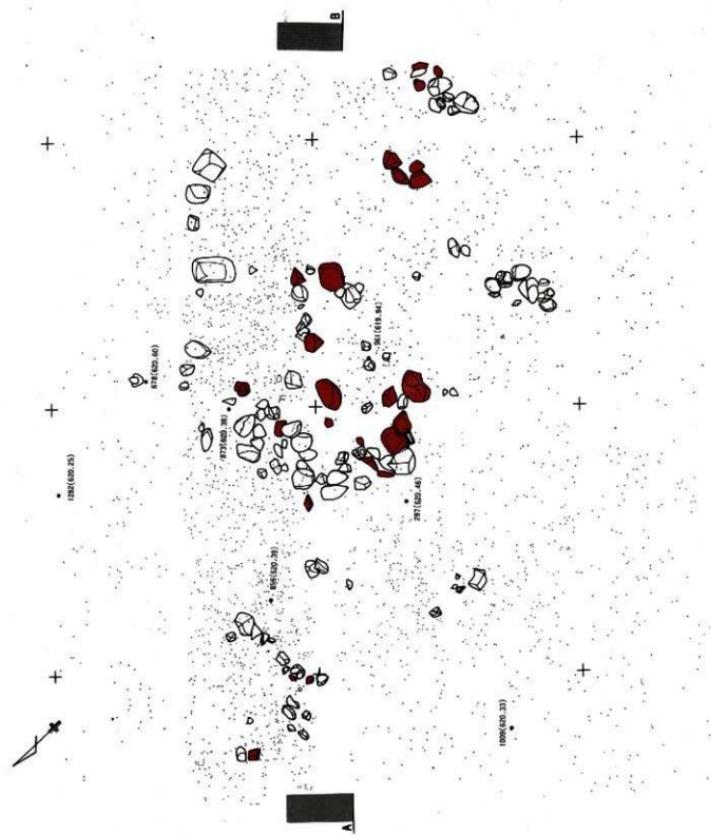
発掘の結果、検出された遺構は次のとおりである。

A地区	縄文中期焼石炉	1基
	弥生後期住居址	1軒
	土壤	2基
B地区	平安時代住居址	1軒
	ロームマウンド	1基
	土壤、柱穴址	50穴
	集石址	1基
C地区	近世暗渠排水址	2基

検出された遺構は少ないが、縄文中期、弥生後期、平安初期という多様な時代に渡っているのが特徴であり、遺跡は前述の3時代に加えて別の時代の遺物及び遺構を持った多期に渡る遺跡であるとも推定できる。

今回の調査では、発掘ヶ所が3地区に分かれているために、遺構の広がりを充分追求することができなかつたが、別の時代の住居址が2軒検出されているが、数軒のグループが集団をなしていたことから考えれば、未確認の遺構が存在していると思われる。土地の傾斜と検出された土器との関係から、また、軌道附近の畠から甕が掘り出されている事実からみれば、A地区の遺構は軌道方向に広がっており、B地区では、伊那田島駅方向に遺構が広がっていると推定される。

昭和55年度から片桐北部地区の圃場整備事業がおこなわれる計画であるが、針ヶ平、溝林、梨ノ木といった遺跡の性格が明らかになれば、片桐地区における同一扇状地面に存在する遺跡の相互の関係が明らかになるものと期待できる。



第6圖 煤石層上部水分散佈圖 (1 : 30)

A.	B.
I. 黑色 I. 黑色 II. 黑色 III. 黑色 IV. 黑色 V. 黑色 VI. 黑色 W. 黑色 X. 灰色 Y. 灰色 Z. 灰色	I. 黃褐色 II. 棕褐色 III. 黑褐色 IV. 黑褐色 V. 黑褐色 VI. 黑褐色 W. 黑褐色 X. 灰色 Y. 灰色 Z. 灰色

第2節 繩文時代の遺構と遺物

A 地区木炭分布と焼石群

1) 調査目的

繩文時代の住居址、土壤等の遺構の検出に伴って、木炭が検出されることが報告されている。今回の調査では、遺構に伴なう炭化物の分布状態が、具体的に、遺構とどのような関係にあるのか、また、遺構を伴わない炭化物の検出状態を調査することにより、炭化物を繩文時代の生活址の一部として考察することを目的におこなった。

2) 調査方法

- I $2 \times 2\text{m}$ 四方のグリットを拡張してベルトを取りはずす。さらに、炭化物が検出されるまで、ジョレン掛けをおこない発掘面を水平に削ってゆく。
- II 遠方を組み、 1m 四方の格子を発掘面に設定する。
- III 木炭分布調査地区の中央に、東西、南北方向にベルトを設け、格子ごとに $3 \sim 4\text{cm}$ の厚さで、水平に下げていく。
- IV 1回削り下げるごとに、検出された木炭の横に竹グシを立てて目印にする。
- V $1/10$ の画面に木炭の位置をおとし、レベルを記入する。さらに、写真撮影をおこない記録に残す。
- VI Vの過程を繰り返し、木炭が検出されなくなるまで続け、同時に検出される、石（焼石を含む）について画面上に落していく。

3) 調査の結果

今回の木炭分布調査は、遺跡全体に渡って調査できなかったうらみもあるが、木炭が集中して検出される範囲では綿密におこなうことができた。

検出された木炭の年代は 4430 ± 130 年前（1950年よりの年数）と判明したが、同層中から、縄文式土器が検出されており、同年代のものと思われる。木炭が集中して現われてくるのは、地表面から $75\text{cm} \sim 80\text{cm}$ ほど掘り下げた地点である。木炭が検出されなくなる下限については、焼石炉が途中で検出されたことから木炭分布調査を打ち切ったことにより不明であるが、焼石炉の出現する高さと同程度と思われる。従って、調査範囲では、 $23 \sim 25\text{cm}$ の厚さで分布しているといえる。木炭の大きさは、小さいもので $4 \sim 7\text{mm}$ 、大きいもので $7 \sim 10\text{mm}$ 程度のものがほとんどを占めていた。木炭が集中して検出される箇所は、焼石がの上にあたる所であるが、焼石炉の周囲に特に多く認められる。焼石は、木炭が検出され始めると同時に検出されたが、検出された石の中で、その率は少なく、27%であった。焼石は、数個のまとまりをもっているが、一ヶ所に集中して検出されなかった。

A 地区 1 号焼石炉

焼石炉は、木炭分布調査地区のほぼ中央、I-4・5、J-4・5 グリッドの中心に検出された。長径 110cm 短径 105cm のほぼ円形に近く、深さ 74cm を計る。大きな木炭が多く丸太の状態のままの木炭も検出された。木炭が焼石炉の下に入り込んでいることが認められ石を投げ込んだためと思われる。底部には石を敷き始めた跡は認められず、ただ、掘り込んだだけのようである。

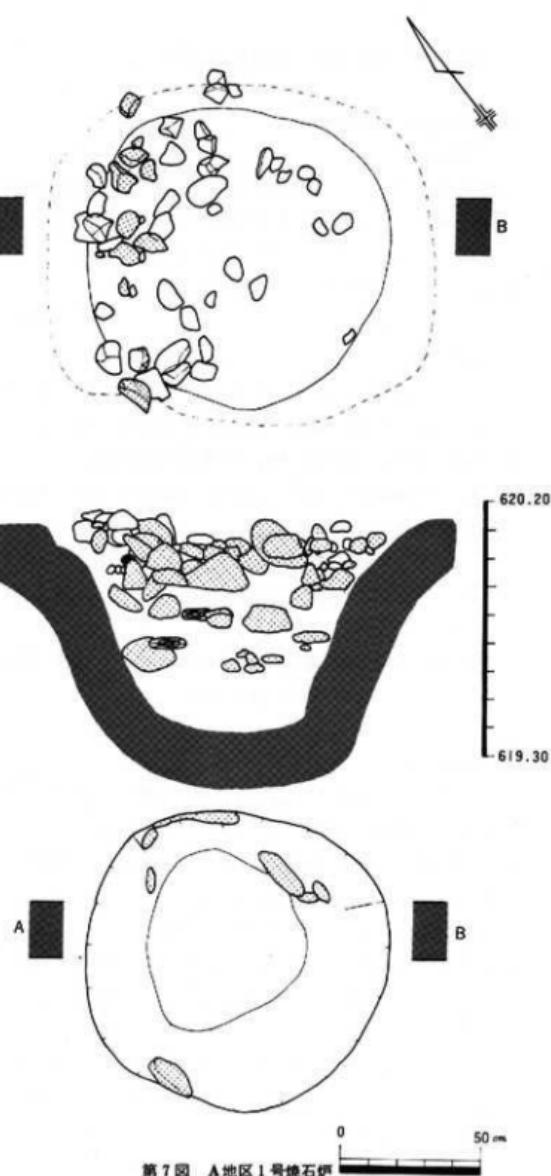
焼石炉から出土する木炭は次のように分類される。

I 層—上部から 20cm まで、木炭は少なく、砂まじりの状態。

II 層—20~50cm まで、大型の木炭ばかりとなる。土はあまり含んでいない。

III 層—50~74cm まで、II 層より細かい木炭ばかりを検出する。

分析の結果、III 層の木炭の年代は、4590±110 年前（1950 年よりの年数）であった。



第 7 図 A 地区 1 号焼石炉

西ヶ原遺跡の¹⁴Cによる年代測定について

西ヶ原遺跡A地区より採集したSample 2点についての測定原理、測定結果は下記のとおりである。

- I ……焼石炉上部木炭分布調査地区より採集 Code No — Gak — 7943
II ……焼石炉内より採集 Code No — Gak — 7944

1. 試料測定の原理

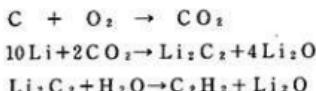
炭素の同位体である¹⁴Cによる年代測定は、測定試料にある炭素が、空気中の炭酸ガスから植物の光同化作用によって有機物となった年代を測定する方法であり、有機物中に含まれる炭素が、すべて同一時期に植物体によって作られたものであることを前提としている。

この年代測定の試料としては、木炭が用いられているが、遺跡の中に木炭が現在まで保存されていた間に、草木の根、あるいは、可溶性の有機物が木炭に附加される可能性がある。これらの保存中に附加されたものを除去し、試料として用いる。

- 1) ……肉眼で判断可能な、植物のひげ根等を除去する。
- 2) ……2%濃度の水酸化ナトリウム水溶液に入れ煮沸する。
- 3) ……水洗いの後、NCHLと煮沸し、水洗・乾燥する。
- 4) 1) ~ 3) の過程で加えたフミン酸等を除去する。

2. 放射能測定のための気体の合成

木炭試料は、次の化学反応でアセチレン（C₂H₂）ガスを合成し、放射能測定用の試料とした。



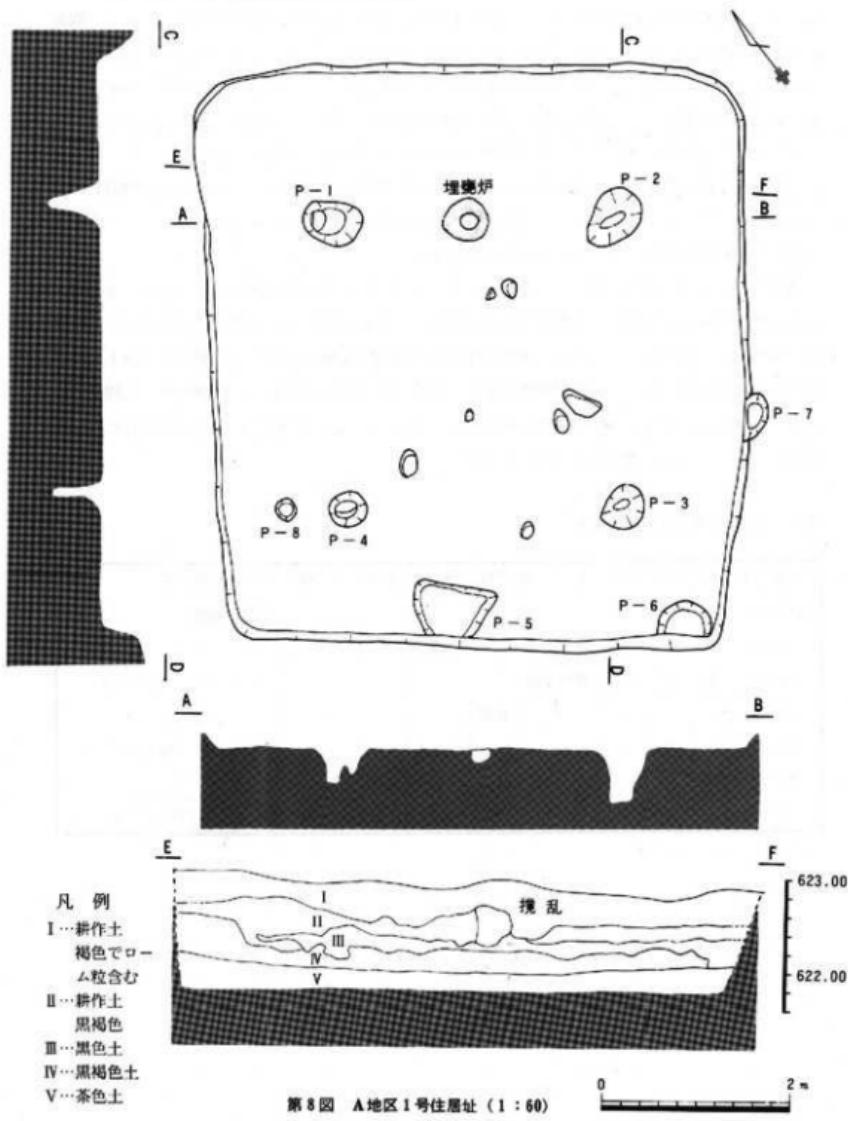
3. β線の計測

合成されたアセチレンガスは、内容積1ℓの比例計数管に封入して、β線の計測をおこなった。比例計数管は宇宙線シールド用の計数管でとりまして、反同時計数を行い、また、厚さ25cmの鉄板によるシールドを行って、低バックグラウンド比例計数管として測定を行った。測定時間は、I、II両Sampleとも20時間である。

なお、年代値の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5570年を使用し、付記した差はβ線計数値の標準偏差σにもとづいて算出した年数で、標準偏差（One sigma）に相当する年代である。試数のβ線計数率と自然計数率の差が2σ以下のときは、3σに相当する年代を下限とする年代値（B·P.）を表示した。

Code No	試 料	B.P. 年代(1950年よりの年数)
Gak - 7943	I ... Charcoal from Nishigahara Site	4430 ± 130
	Sample No.A. (NA)	2480 B.C.
Gak - 7944	II ... Charcoal from Nishigahara Site	4590 ± 110
	Sample No.B.	2640 B.C.

第3節 弥生時代の遺構と遺物



第8図 A地区1号住居址 (1 : 60)

0 2 m

A地区1号住居址

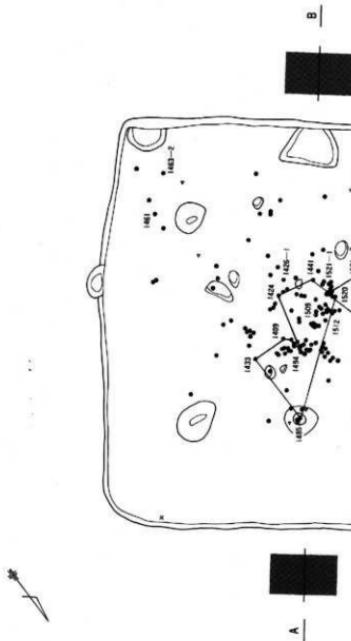
調査された住居址は南北6.10m、東西5.7mの大きさで、主軸の方向NE69°を計る。周長を測ると、北壁長5.6m、東壁は6.15m、南壁は5.2m、西壁は5.95mとそれぞれ異なる長さの隅丸長方形堅穴住居址である。壁は、11~15度の角度で掘り込まれている。壁は断面図で見るようなあまり凹凸のない傾壁で、壁面には何の施設も認められなかった。床は硬く踏みかためられた床面である。床は更に3%の傾斜をなし、床の中程が10cmのくぼみが認められる床面である。

柱穴は4ヶ所発見された。その位置は壁より90cm~1.2m入った場所に作られている。掘り込みの形状は上面は円形又は隋円形であるが、柱穴の中間から16~27cm×7~10cmの長楕円形の掘り込みとなっている。この柱穴のむきは、住居址の対角線に平行して掘られている。こうした柱穴は、宮田村姫宮遺跡に多く見られるところである。

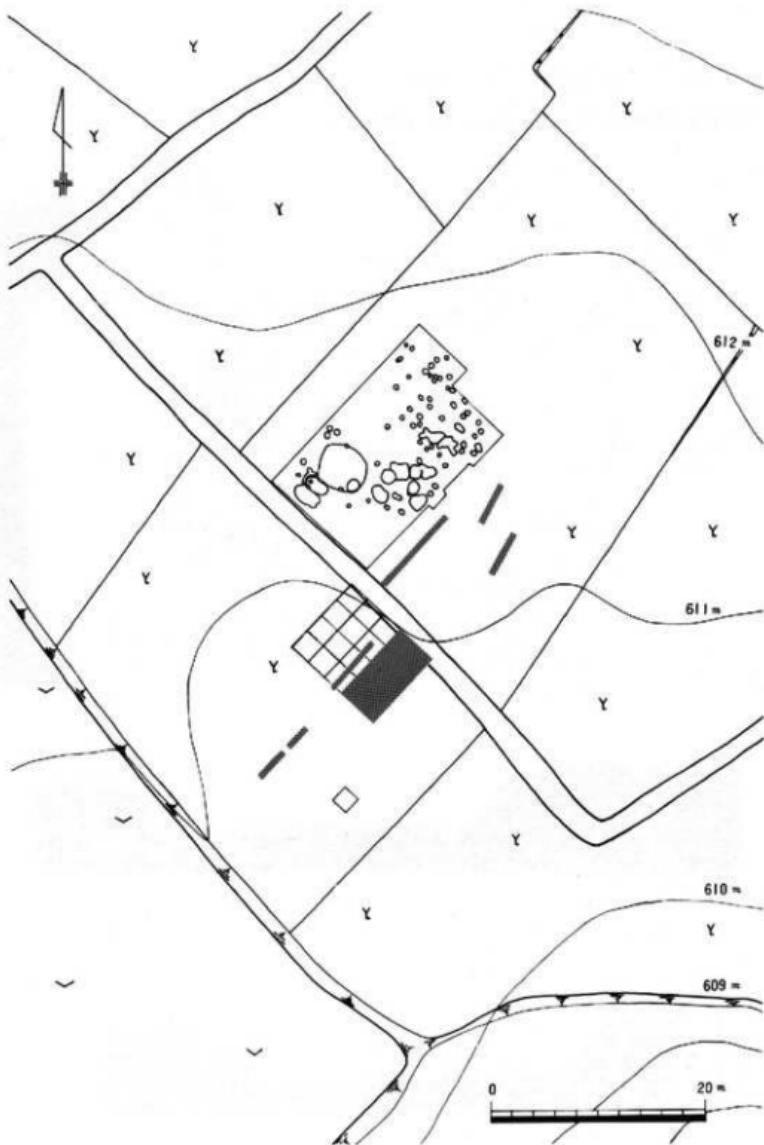
遺物は、住居址の中央に集中して発見された。土器では、弥生式土器が大半を占め、その他、縄文中期、黒曜石、内耳、中世陶器等が発見された。垂直の分布は、実測図で見るよう、第1層と第IV層の二層に集中している。遺物は第1層では縄文中期、内耳、中世陶器等が出土したが、IV層では弥生式土器のみで、他の遺物が混入していない点が注目される。埋甕炉は、北側P-1とP-2の中間に位置している。甕の周辺が広く焼けているのは、相当長い間使用されたことを物語っている。なお、甕は底部を欠いていた。

表1 A地区1号住居址出土遺物

台 舟 №	図	図版	分類	器 種	部 位	材 質	接 合	同一個体	時代・時期	備 考
NA1426-1	32		土器						弥生 後期	
〃 1444	34	5	石器	礫 器		花崗岩		" "	回 石	
〃 1461	32	8	土器	甕形土器				" "	底部を欠く	
〃 1463-2	"			"	底部			" "		
〃 1485	"	8		"				" "	胴部以下欠く	
〃 1512	"			"	底部		1509	" "		
〃 1521	"	8		"	胴部			1407, 1409, 1424, 1433, 1441, 1485, 1494-2, 1520, 1521-	無 文	



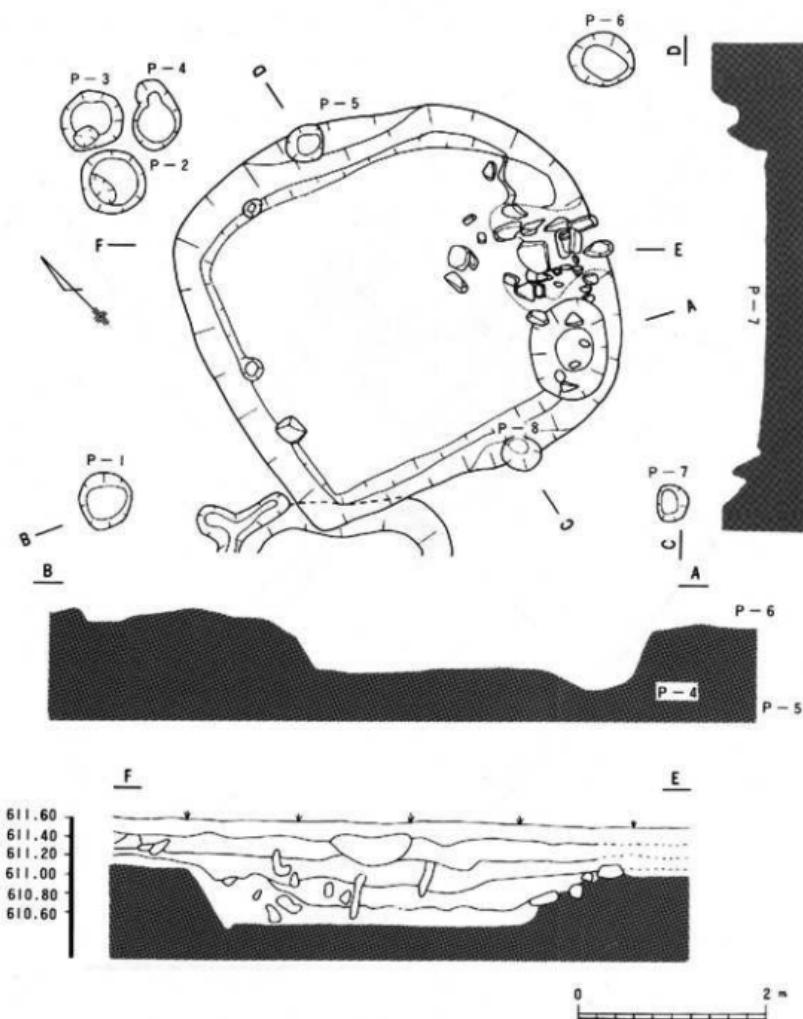
第9图 A地区1号柱基出土物分布图(1:40)



第10図 B地区造構配置図

第4節 平安時代の遺構と遺物

B地区1号住居址と出土遺物（第11, 12, 13図・表2）



第11図 B地区1号住居址 (1:60)

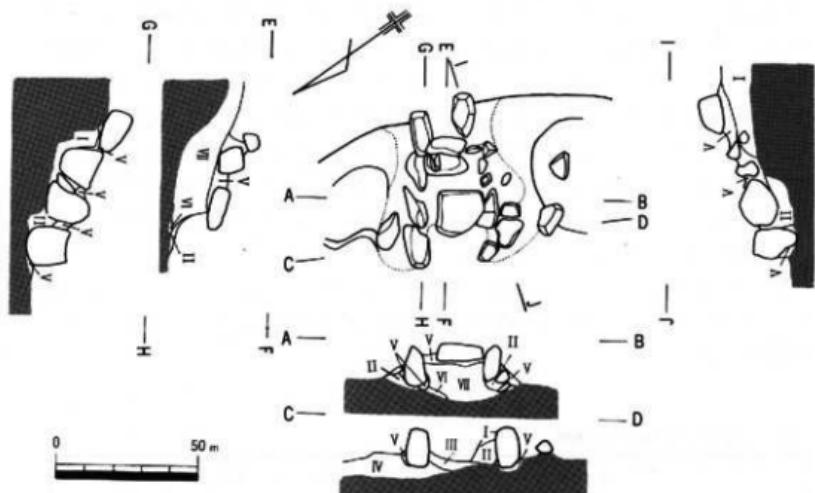
B地区1号住居址

1号住居址は、B～Eの3グリッドにかかって検出された平安時代の堅穴式住居址である。プランは、長軸436m、短軸400mの隅丸方形をなし、S E 66度の主軸方向を示している。北壁の中央部は中程が2段になり、その2段の上部に穴がうたれている。西壁は中段ではなく、傾壁で壁面には何の施設も見受けられない。南壁は、中央やや東よりの中段上部に北壁と同様の穴が掘られている。これら2ヶ所の穴は、上屋梁の支柱穴ではないかと考えられる。東には、石芯の粘土カマドが設けられている。床は多々凹凸するが、堅い床面である。柱穴は床面には発見されず、壁外より検出され、4本柱である。カマドの右側に凹が設けられ、木炭や灰が多く発見された。住居の南西の角はロームマウンドを切り込んでいる。

遺物の平面分布をみると、カマド周辺に集中している。西側に行く程少なくなっている。遺物は平安時代の土師器が大半を占め、須恵器、灰釉陶器、中世陶器が発見された。遺物はほとんどが原形をとどめていない。

表2 B地区1号住居址出土遺物

台帳No	図	図版	分類	器種	部位	材質	接合・同一個体	時代・時期	備考
NB 300	32		土師土器	内 黒 脼	底部		301, 307, 309, 310 311, 315	平 安	
〃 316			"	"	"		474	"	
〃 334	33		"	"	"		340	"	
〃 567	32		"	"	"			"	
〃 509	33		"	"	"			"	
〃 321	33		"	"	"			"	
〃 533			"	壺形土器	頸部		539	"	
〃 549	32		"	"	"		556, 576-1, 576-2	"	
〃 562-1	33		"	"	"		562-2, 563, 569 573	"	
〃 575-1	33		"	"	頸部		575-2, 576, 570 572, 577	"	



凡 例

- | | |
|---------------|--------------------|
| I … 黒茶色土 | V … 黒色土混入暗茶褐色土 |
| II … 焼土混入黒茶色土 | VI … III層より焼土量は少ない |
| III … 焼土 | VII … II層より焼土量は少ない |
| IV … 暗茶褐色土 | |

第12図 カマド断面図 (1 : 20)

1号住居址カマド

B地区1号住居址の東隅に検出された。組成は石芯粘土カマドである。カマドの規模は60×50cmで、保存状態は良く、焚口から煙道にかけての立ち上がりが大きく、燃焼効果を高める工夫がほどこされている。焚口の周辺からは、土師壺が出土した。また燃焼部からも大型の土師壺の口縁部から胴部にかけての破片が出土した(図版7)。焚口付近には多量の焼土が認められ、煙道部では焼土量は少なくなっていた。カマド焚口および南隣りのくぼみからは多量の灰と木炭が検出された。

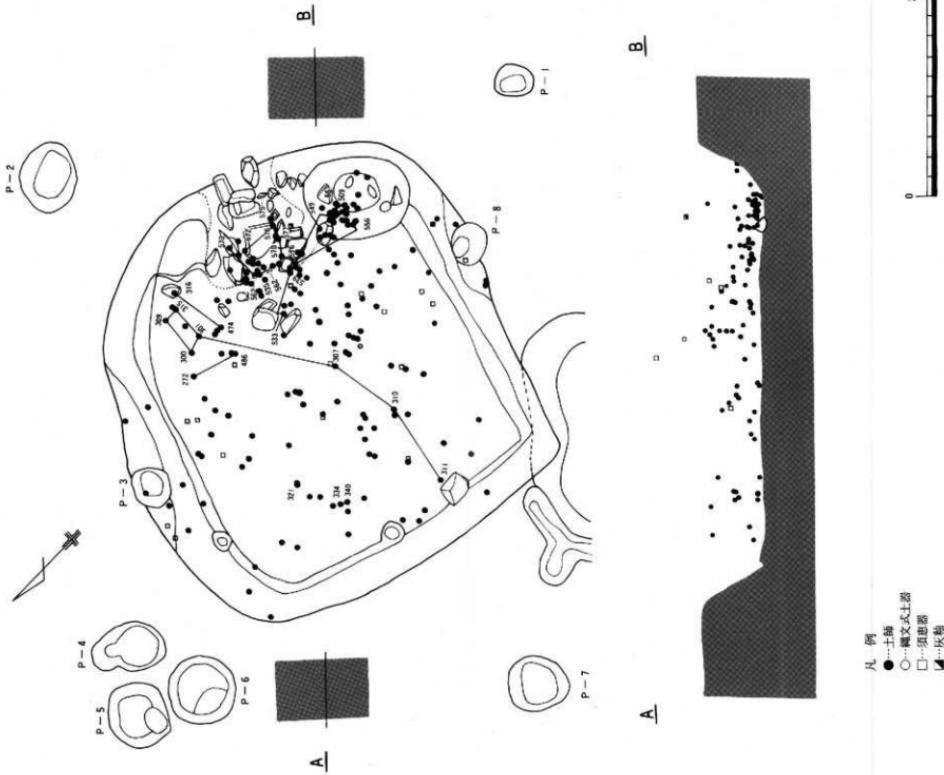
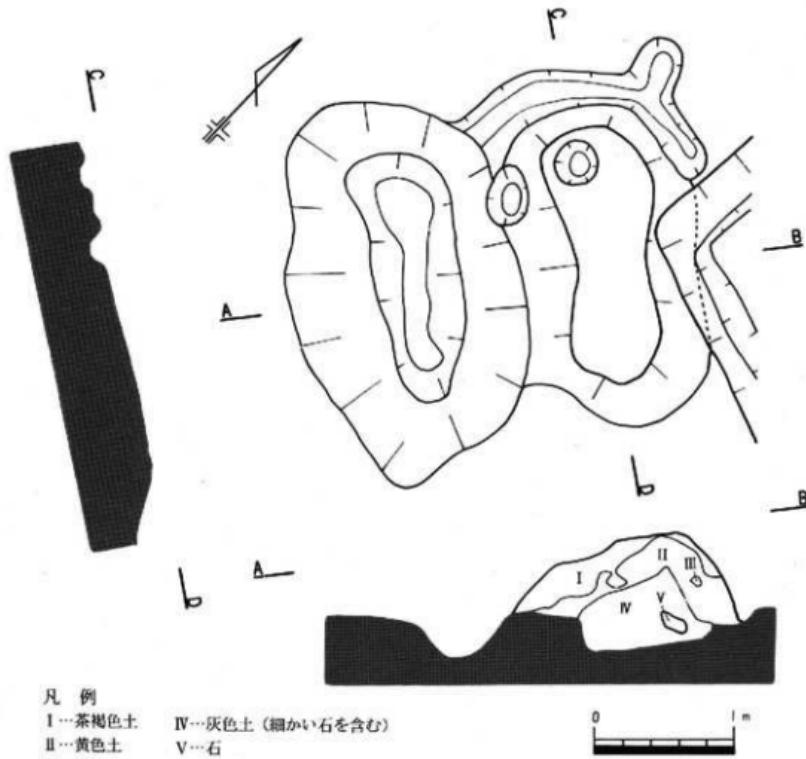


图11 B地区居民遗址遗物分布图 (1:40)

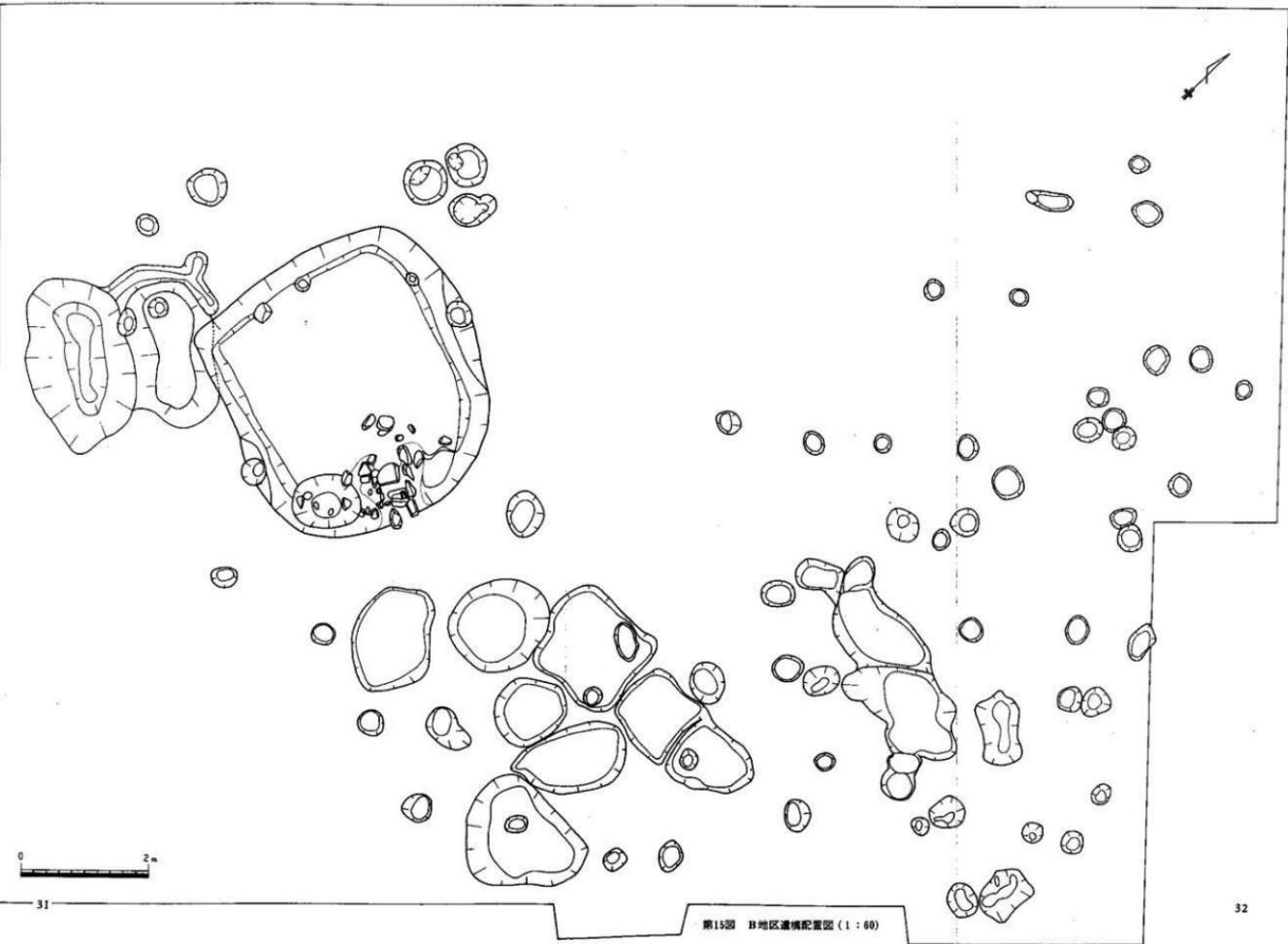
B地区1号ロームマウンド



第14図 B地区1号ロームマウンド (1 : 40)

1号住居址の西側にあたる。ロームマウンドは東西2.5m, 南北1.3m, 高さは70~80cmである。封土はI……茶褐色, II……黄色土, IV……灰色土である。

ロームマウンドの西側の凹みは、東西2.7m, 南北1.6m, 深さ60~75cmと推定される。底部は丸味を帯びて、やや東にわずかに傾斜する。底部の長径は1.65m, 幅60cmで舟底形を呈する。掘り込まれた大きさと形から、人の埋葬を意識させる感じである。北側に盛られたロームマウンドは、祭壇を思わせるものであるが、ロームマウンド。西側の凹みからは遺物は明らかではなかった。なお、住居址がロームマウンドの北側を切りとて掘り込まれていた。

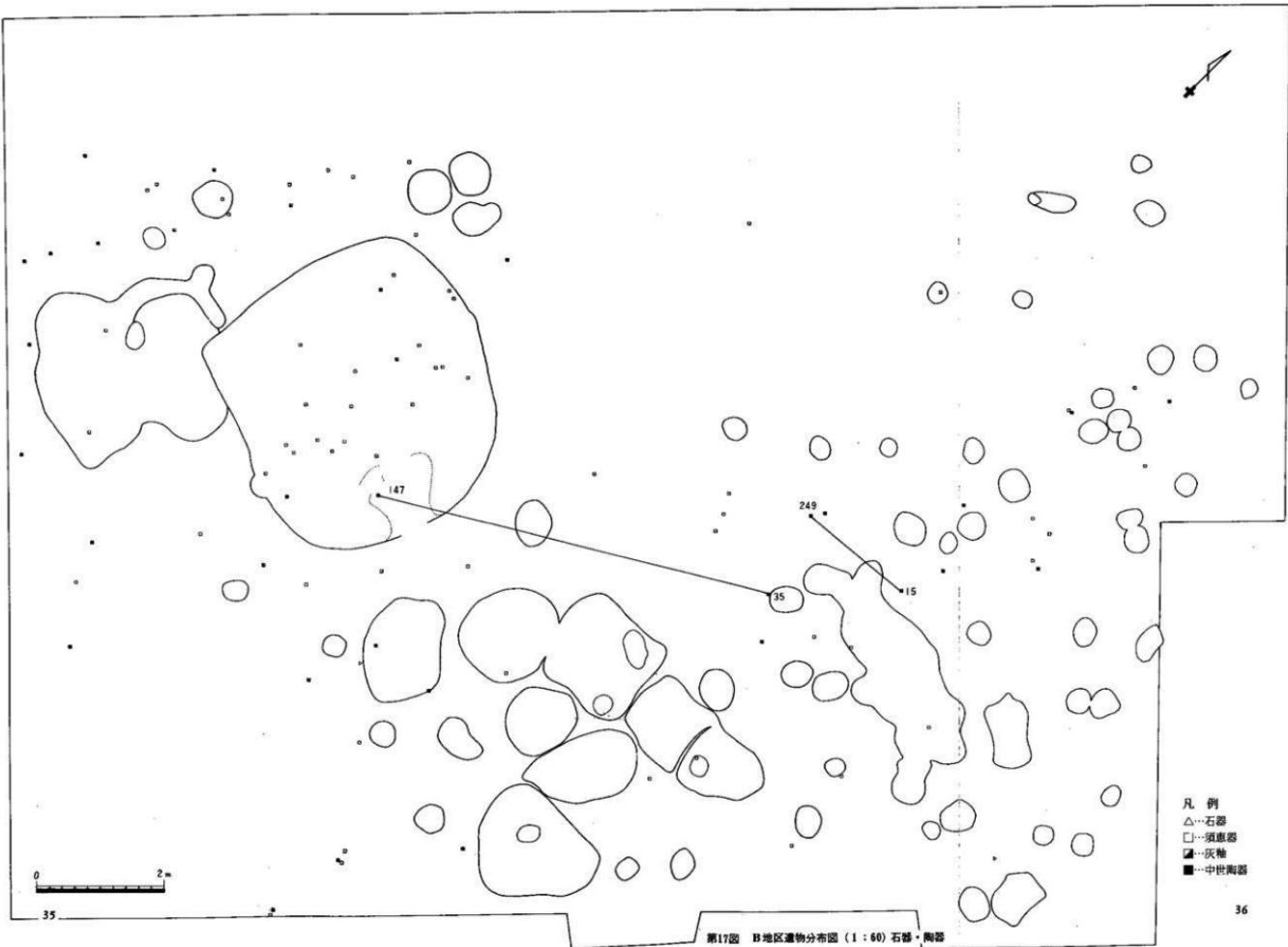


31

第15図 B地区遺構配置図 (1:60)

32





第17図 B地区遺物分布図 (1:60) 石器・陶器

第5節 土壙及び柱穴址

土壙、柱穴址 (第18、19、20、21、22、23、24、25図 表3、4)

調査の結果、住居址の北側に検出されたが、調査地区が限られたために、全体の姿がわかったとは言えない。遺構については、第19～第25図の平面図に示してあるが、遺構全体については、第15図で示してある。

今回の調査では、土壙5ヶ所、柱穴址50ヶ所が検出された。土壙は、住居址の東に集中しているのに対して、柱穴址は住居址の北に延びているものと思われる。検出された柱穴址は、ほぼ同じ規模のものであったが、配置に規則性を見つけることは困難であった。

<凡例>

(平面形)

a 円形の小形のもの

A 円形のやや大形のもの

b 楕円形のやや大形のもの

B 楕円形のやや大形のもの

C ピットが連結したもの

D 不整形のもの

(断面形)

I タライ状のもの

II 底の浅いもの

III 底が II より深いもの

IV 二つ以上のピットが複合するもの

V 底が丸みを持つもの

VI 底、壁が明瞭でないもの

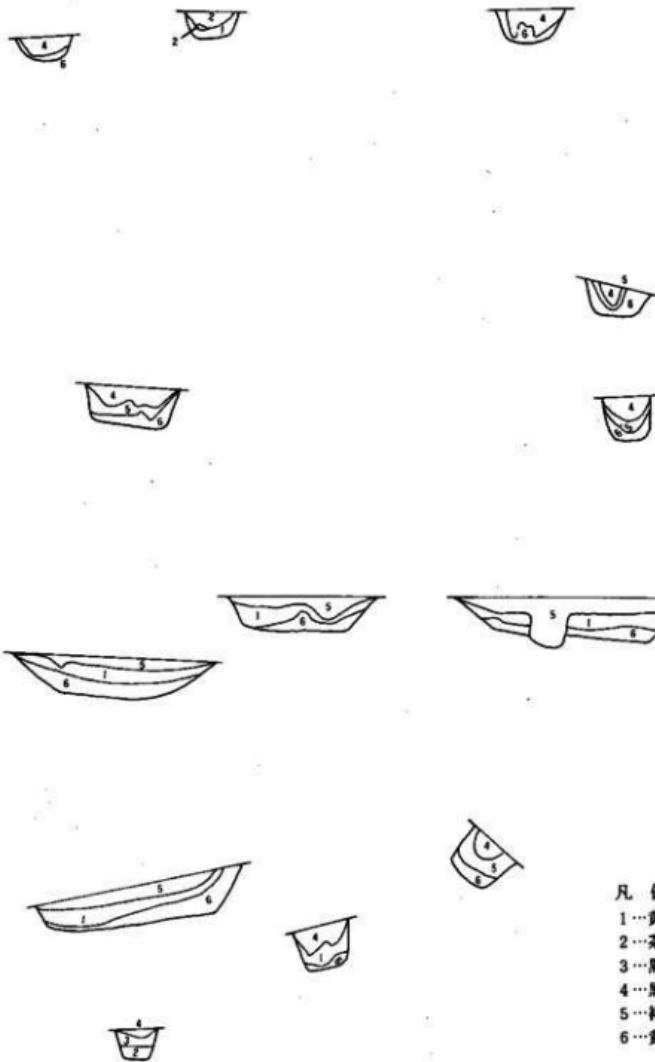
表3 土壙一覧

土壙番号 (地区)	位置	平面図		断面図		覆土	遺物組成		備考
		タイプ	短径×長径	タイプ	深さ		土器	石器	
1	B	D	160×195	IV	35cm				
2	B	A	100×115	I	20				
3	B	A	140×155	I	30				
4	B	B	120×175	I	30				

表4 柱穴一覧

柱穴番号 (地区)	位置	平面図		断面図		覆土	遺物組成		備考
		タイプ	短径×長径	タイプ	深さ		土器	石器	
1	B	a	28×37cm	III	32cm				
2	B	b	38×50	III	22				
3	B	b	48×50	III	25				
4	B	a	28×32	II	10				
5	B	c	30×48	III	22				P29と連結
6	B	b	42×58	III	20				
7	B	a	36×38	II	15				
8	B	c	40×49	III	32				P50と連結

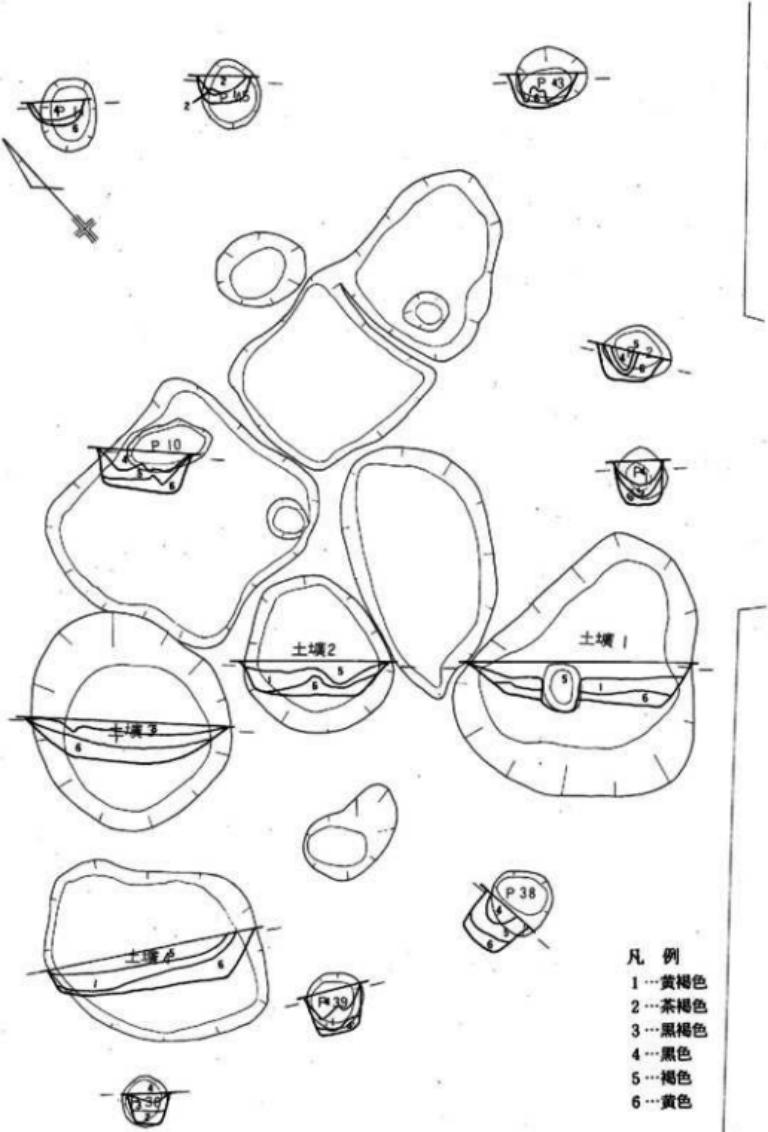
柱穴 番号	位置 (地区)	平面形		断面形		覆土	遺物組成		備考
		タイプ	短径×長径	タイプ	深さ		土器	石器	
9	B	B	54 × 114cm	III	30cm				
10	B	b	37 × 63	III	29				
11	B	b	40 × 52	II	17				
12	B	b	44 × 76	II	20				
13	B	b	26 × 57	V	30				
14	B	a	42 × 44	V	25				
15	B	b	34 × 40	V	20				
16	B	a	28 × 30	II	10				
17	B	a	37 × 38	II	17				
18	B	b	24 × 27	II	8				
19	B	a	36 × 37	V	15				
20	B	C	28 × 40	II	16				P 21 と連結
21	B	C	38 × 40	III	28				P 20 と連結
22	B	b	34 × 62	II	15				
23	B	a	28 × 32	II	10				
24	B	a	30 × 32	II	9				
25	B	a	35 × 35	II	8				
26	B	b	47 × 57	II	14				
27	B	b	46 × 54	II	14				
28	B	a	27 × 30	II	17				
29	B	b	41 × 57	II	17				
30	B	a	34 × 37	III	23				
31	B	b	30 × 40	V	13				
32	B	b	39 × 46	II	16				
33	B	b	38 × 50	II	14				
34	B	b	46 × 53	III	38				
35	B	b	38 × 46	III	28				
36	B	C	33 × 39	II	23				
37	B	C	35 × 38	II	16				
38	B	b	43 × 46	III	34				
39	B	a	40 × 40	III	30				
40	B	a	37 × 40	II	10				
41	B	b	26 × 32	II	13				
42	B	D	30 × 70	II	9				
43	B	a	33 × 37	V	14	底部に須恵器			
44	B	a	26 × 29	II	15				
45	B	b	42 × 50	II	18				
46	B			VI	34				
47	B	a	30 × 33	II	20				形が不明瞭
48	B	a	26 × 32	II	9				
49	B			II	22				
50	B	c	38 × 38	V	15				P 8 と連結



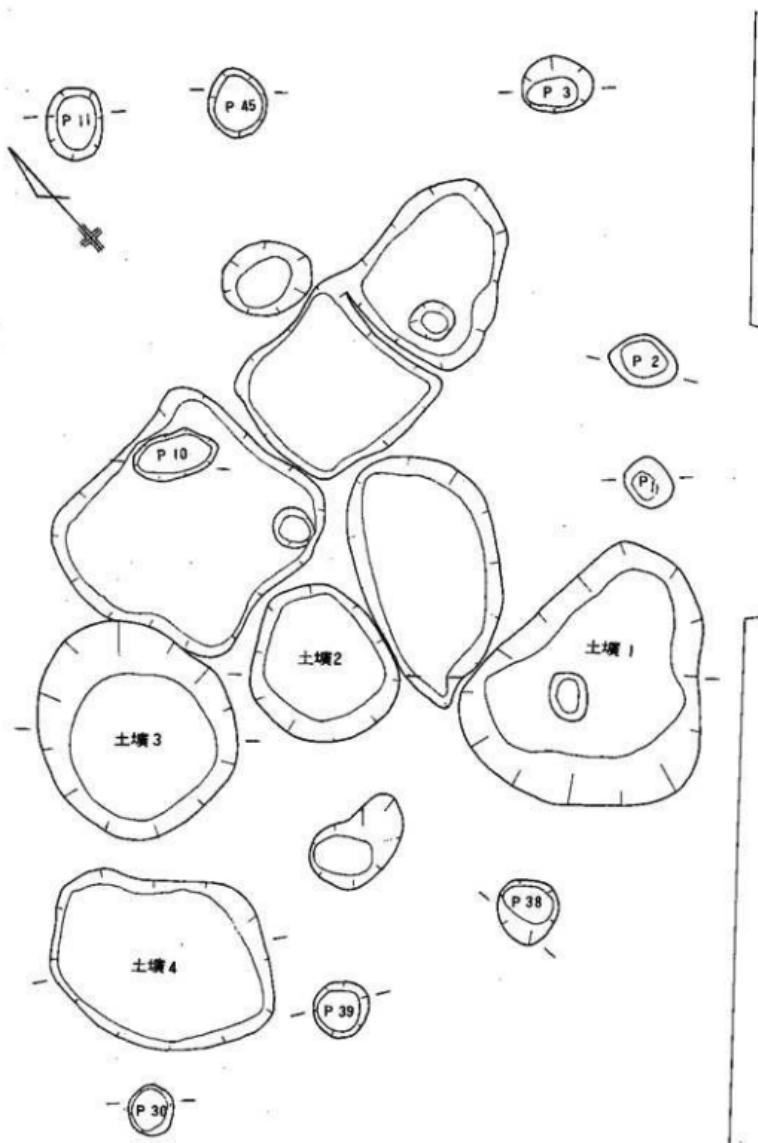
凡例

- 1…黄褐色
- 2…茶褐色
- 3…黑褐色
- 4…黑色
- 5…褐色
- 6…黄色

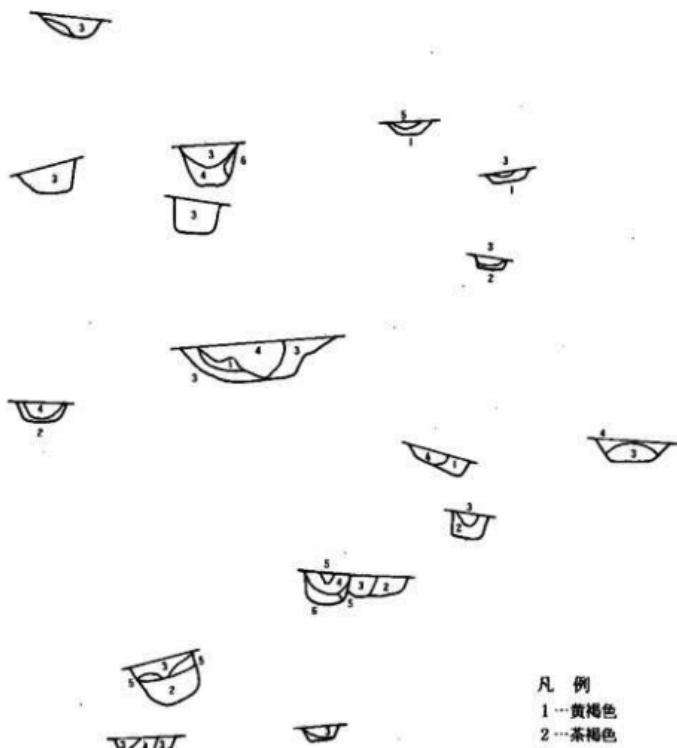
第18图 土壤断面图 (1:40)



第18図 土壌断面図 (1 : 40)

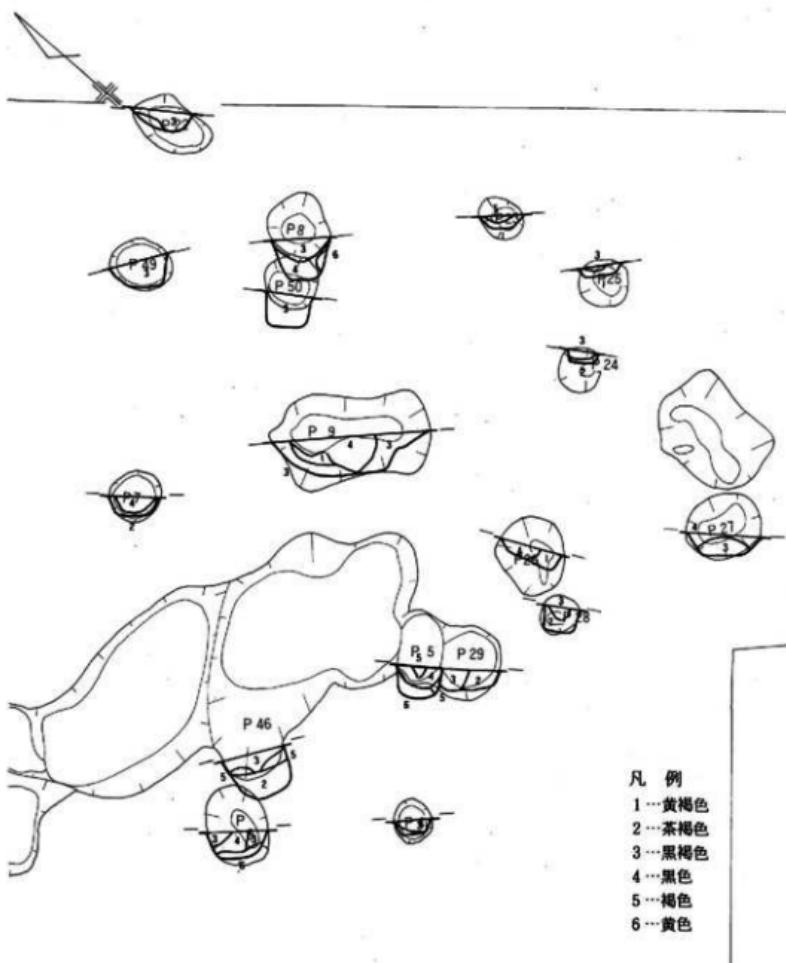


第19図 B地区土壤配置図

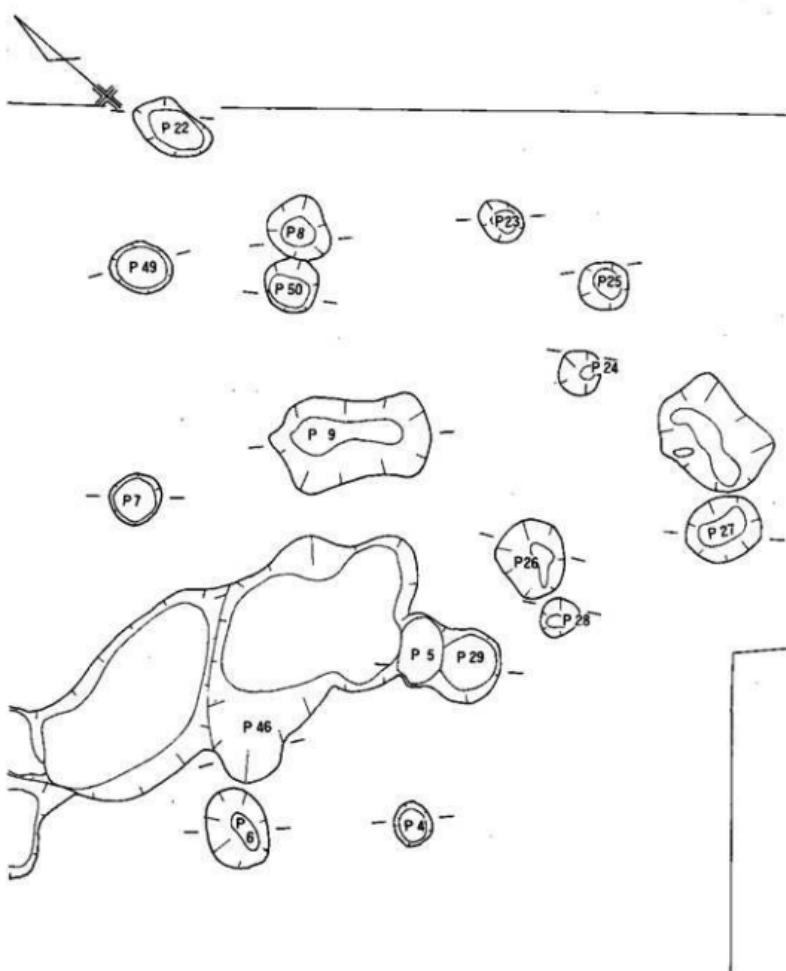


凡例
 1 … 黄褐色
 2 … 茶褐色
 3 … 黑褐色
 4 … 黑色
 5 … 棕色
 6 … 黄色

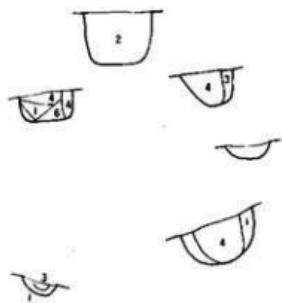
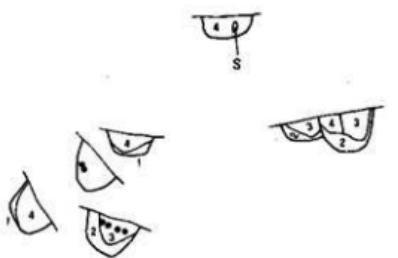
第20图 柱穴断面图 (1 : 40)



第20図 柱穴断面図 (1 : 40)

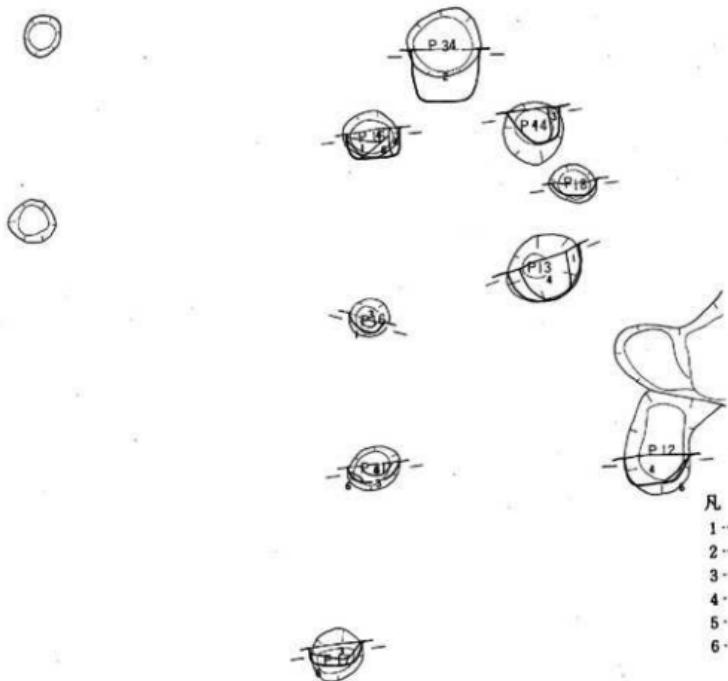
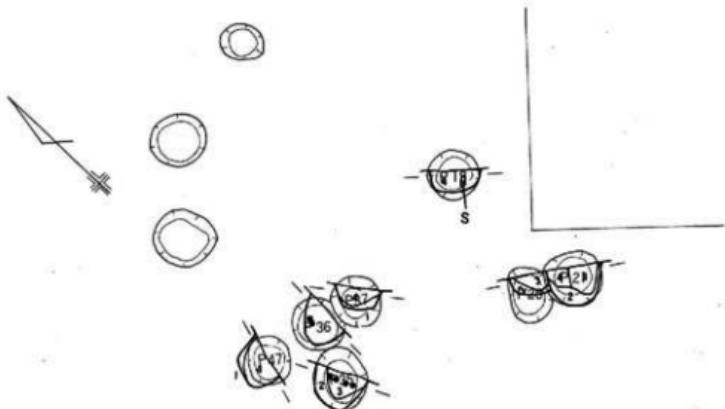


第21図 柱穴配置図



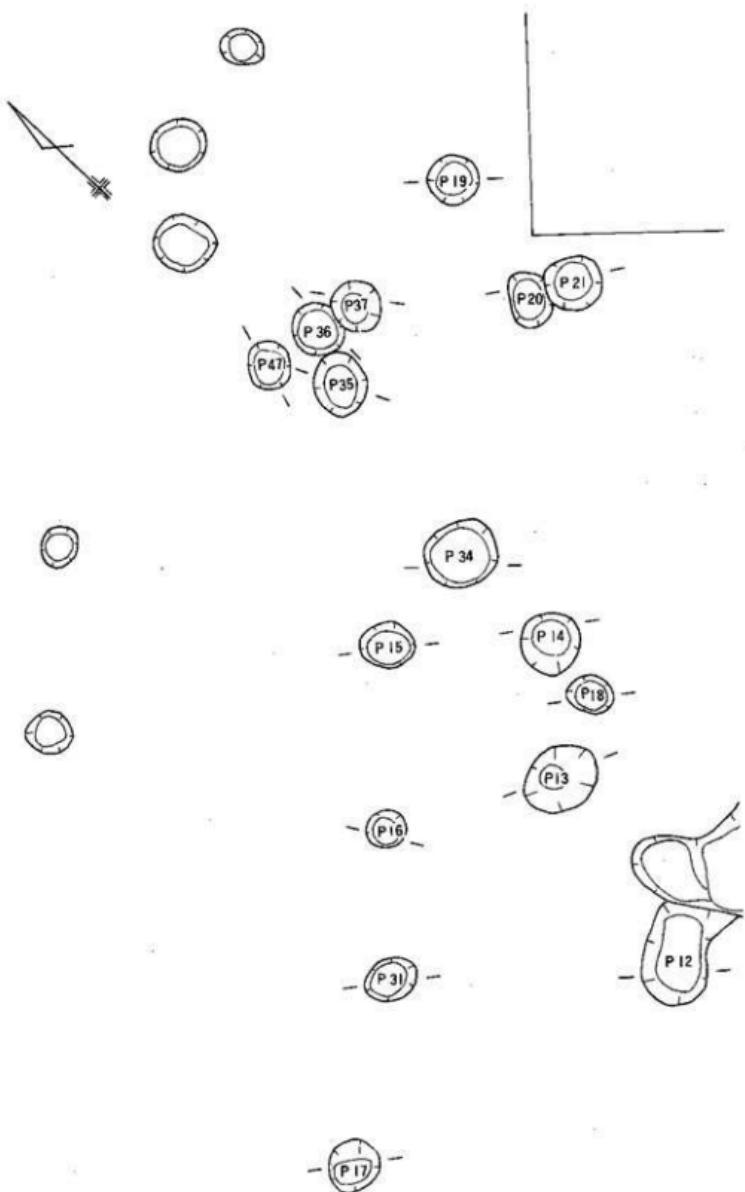
凡例
1…黄褐色
2…茶褐色
3…黑褐色
4…黑色
5…褐色
6…黄色

第22圖 柱穴断面図 (1 : 40)

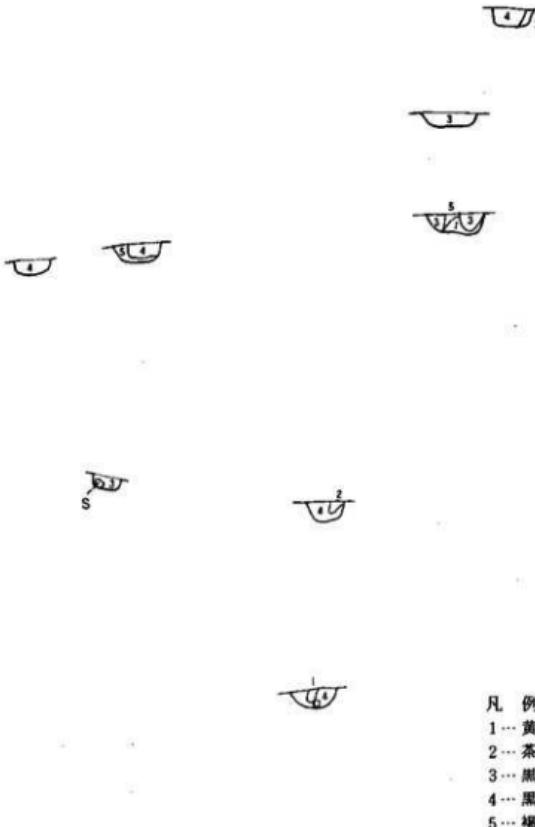


凡例
 1…黄褐色
 2…茶褐色
 3…黒褐色
 4…黒色
 5…褐色
 6…黄色

第33圖 柱穴断面図 (1:40)



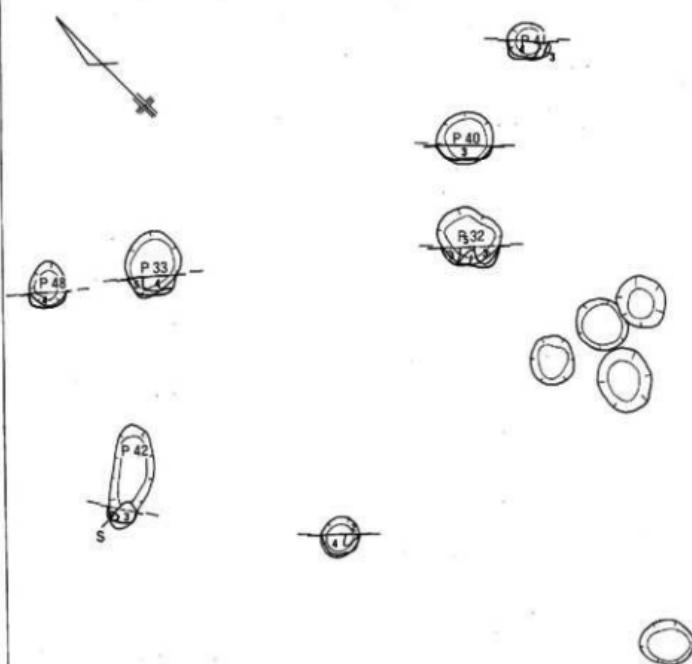
第23図 柱穴配置図



凡 例

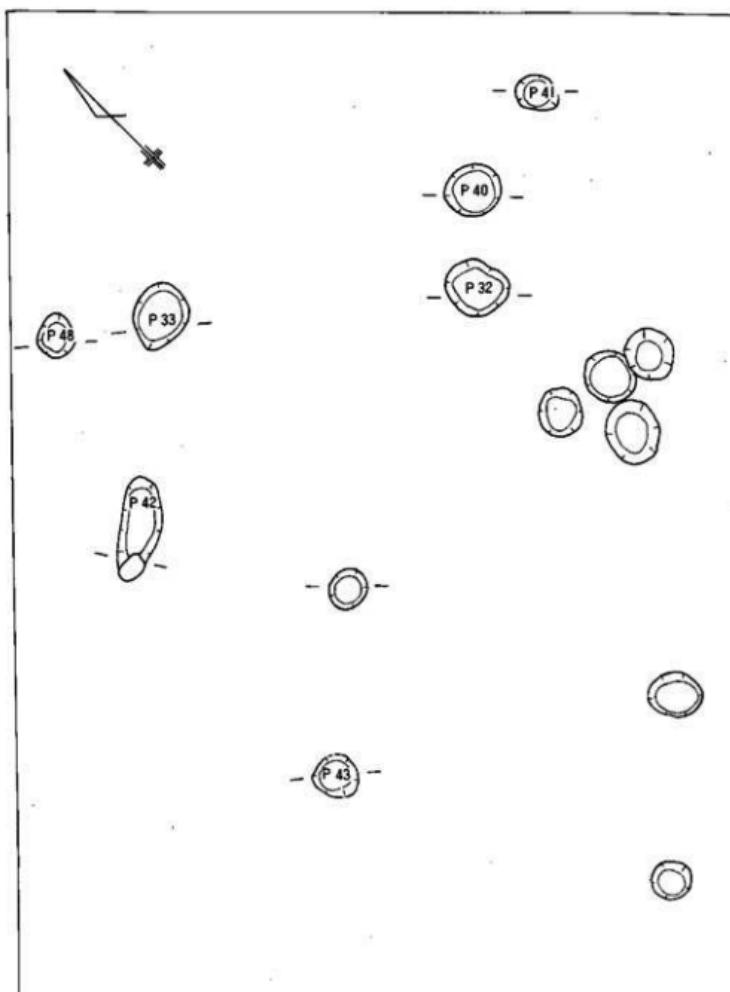
- 1 … 黄褐色
- 2 … 茶褐色
- 3 … 黑褐色
- 4 … 黑 色
- 5 … 楔 色

第24図 柱穴断面図 (1 : 40)



凡 例

- 1 … 黄褐色
- 2 … 茶褐色
- 3 … 黑褐色
- 4 … 黑 色
- 5 … 褐 色

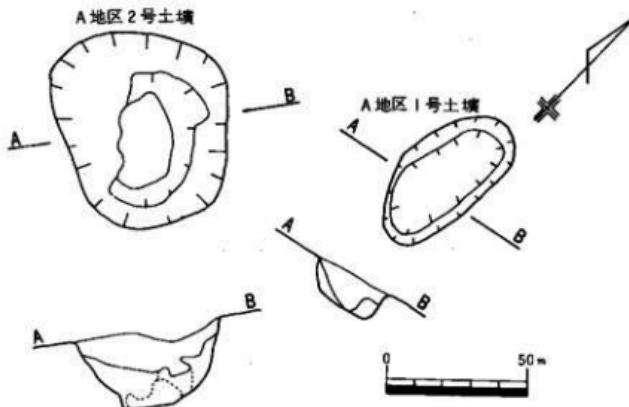


第25図 柱穴配図

第6節 その他の遺構・遺物

A地区1、2号土壤

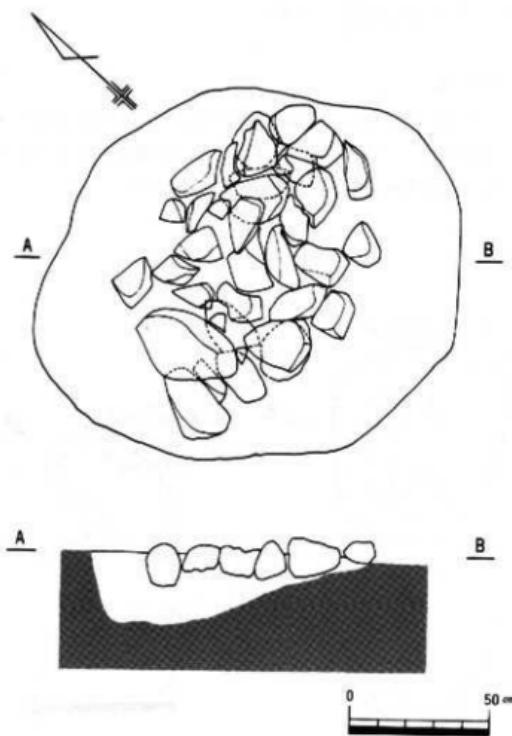
1号土壤、2号土壤はA地区の北側に検出されたが、1号住居址、焼石炉との関係は不明である。1号土壤は長径114cm、短径60cm、深さ25cm。2号土壤は長径140cm、短径120cm、深さ55cm。土壤からは、遺物は検出されなかった（図26、図版13）。



第26図 A地区1・2号土壤 (1:20)

B地区1号集石土壤

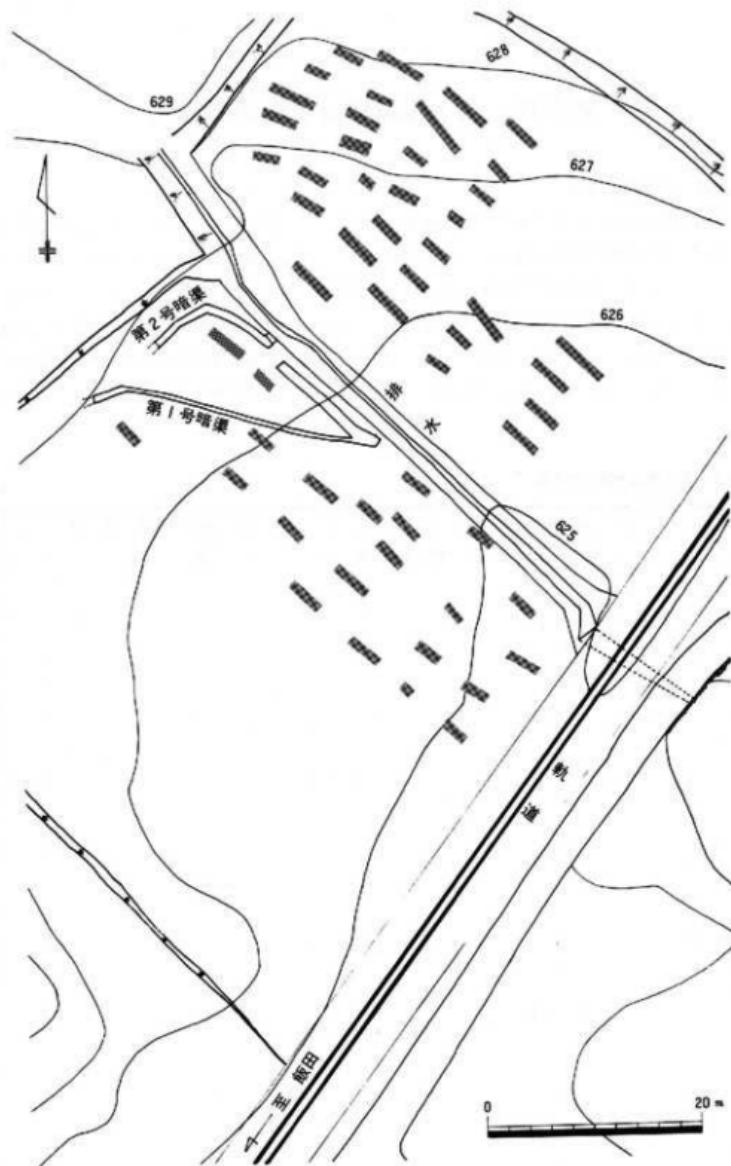
B地区南側に検出された。表土下50cmほどの深さにあり、黒色土の落ち込みの中に40~5cmの石が集中していた。規模は、140×130cm、深さ25cmである。集石は花崗岩からなり、焼石ないしは酸化は認められなかった。集石は、土壤上部に集中しており、敷きつめたような状態である。遺物は検出されず、付近の遺構との関係は不明である（図27、図版12）。



第27図 B地区1号配石址 (1:20)

C地区1、2号排水址

軌道の西側に発見されたものであるが、現在の排水につながるように延びている。1、2号排水址は、南西の方向に続いており、一本の排水が分かれたものと推測される。両壁に石を並べ、蓋石をした構造になっている。1号排水址からは縄文式土器が数点検出されたが、排水址との直接の関係はなく、おそらく、排水内部に落ち込んだものと思われる。土地の湿気をぬくための暗渠排水と思われるが、近世のものであろう。



第28図 C地区遺構配置図

第IV章 西ヶ原遺跡及び周辺の遺物

遺物A (第29図、表4)

木炭検出地区出土の土器である。地区は第6図参照。1は覆土中から出土した連続爪型文を横位に施した縄文中期中葉の深鉢形の土器片である。2~7は半截竹管による平行沈線文土器の破片。うち3, 7は木炭検出の層位から出土した土器である。8~12は縄文を地文として範状器具により縦及び斜位に沈線文が施された深鉢形土器片。13~19は範状器具により梢円または縦位に沈線文が施された深鉢形土器。20~22は、範状器具の先端で連続刺突文を施した深鉢形土器である。23~31は結節縄文をもつ土器片である。以上の土器は曾利II式に比定されるものである。

表4 木炭検出地区出土土器

台帳No	図 No	分類	器種	部位	材質	接合	時代・時期	備考	グリッド
NA 923	29	1	縄文土器	複形土器	肩 部		縄文 中期		H-6
NA 873	"	2	"	"	口縁部		"		I-5
NA 678	"	3	"	"	頸 部		"		J-5
NA 932	"	4	"	"	"		"		H-5
NA 965-1	"	5	"	"	"		"		II-5
NA 1215-1	"	6	"	"	"		"		M-5
NA 1282	"	7	"	"	"		"		I-5
NA 1009	"	8	"	"	肩 部		"		H-4
NA 297	"	9	"	"	"		"		I-4
NA 933	"	10	"	"	"		"		H-6
NA 856	"	11	"	"	"		"		I-5
NA 1543	"	12	"	"	"		"		K-3
NA 948	"	13	"	"	頸 部		"		H-5
NA 1123	"	14	"	"	"		"		K-4
NA 1126	"	15	"	"	"		"		K-5
NA 1124	"	16	"	"	肩 部		"		K-4
NA 1100	"	17	"	"	"		"		N-2
NA 151	"	18	"	"	"		"		J-3
NA 444	"	19	"	"	"		"		H-6
NA 266	"	20	"	"	口縁部		"		J-3
NA 694	"	21	"	"	頸 部		"		N-1

台帳No.	図	図No.	分類	器種	部位	材質	接合	時代・時期	備考	グリッド
NA1085-1	29	22			口縁部			縄文 中期		L-4
NA1085-2	"	23			胴 部			"		L-4
NA 882	"	24			"			"		I-6
NA 961	"	25			"			"		J-4
NA1016	"	26			"			"		H-4
NA 833	"	27	縄文土器	變形土器	"			"		I-7
NA1273	"	28	"	"	"			"		H-6
NA 887	"	29	"	"	"			"		I-6
NA 882	"	30	"	"	"			"		I-6
NA 455	"	31	"	"	"			"		J-9
NA 157	"	32	"	"	頭 部			縄文 後期		J-3
NA 992	"	33	弥生土器	"	"			弥生 後期		H-4

石器は、(第34・35・36図、表5) 1はNA H-5グリッド木炭検出層より出土した硬砂岩の打製石斧である。他の石器は全て覆土中から発見された石器である。

表5 石器一覧表

図No.	台帳No.	分類	器種	材質	図No.	台帳No.	分類	器種	材質	図No.	台帳No.	分類	器種	材質
1	NA968	石器	打製石斧	硬砂岩	10	NA1444	石器	凹 石	花崗岩	19	NB表	石器	打製石斧	粘板岩
2	" 582	"	"	"	11	" 784	"	石 鍤	硬砂岩	20	"	"	大型石器	硬砂岩
3	" 1119	"	"	粘板岩	12	" 751	"	投 弾	不 詳	21	分人林 92	"	打製石斧	粘板岩
4	" 1274	"	"	硬砂岩	13	" T-16	"	スクレイパー	黒曜石	22	" 307	"	"	"
5	" 630	"	"	"	14	NB表	"	有孔磨製石鏟	頁 岩	23	" 91	"	石 錐	硬砂岩
6	" 1223	"	"	"	15	NA表	"	打製石斧	粘板岩	24	" 98	"	石 鍤	"
7	" T-16	"	磨製石斧	粘板岩	16	"	"	"	硬砂岩	25	" 863	"	敲打器	(使用痕アリ)
8	" 1195	"	"	"	17	"	"	石 錐	"					
9	" 402	"	石 錐	不 詳	18	NB表	"	打製石斧	粘板岩					

遺物B (第30図、表6)

A地区グリッドより出土した土器である。34~35は細い粘土縞を器体に貼付して同心半円状、或いは格子目状の文様を構成する土器である。時期は縄文中期曾利I式に比定される土器。36~40は竹管具による縞、横、斜、縞杉状に施文された土器。41~51は縄文を施した土器の破片。52~56は籠状器具により太い沈線を施文した変形土器。57~60は、結節縄文に縞の沈線を施した土器である。61~63・64~67は籠状器具の先端で連続刺突した土器。65~66~68は縄文土器。34~35以外は曾利II式に比定される土器である。

表6 A地区出土土器

台帳No	図	図No	分類	器種	部位	材質	接合	時代・時期	備考	グリッド
NA 421	30	34	縹文土器	變形土器	頸部			縹文 中期	G-3	
NA 884	"	35	"	"	肩部			"	I-7	
NA 333	"	36	"	"	"			"	J-7	
NA 387	"	37	"	"	"			"	I-2	
NA1538	"	38	"	"	"			"	K-8	
NA1106	"	39	"	"	口縁部			"	L-5	
NA 223	"	40	"	"	肩部			"	J-7	
NA 431	"	41	"	"	頸部			"	H-2	
NA 264	"	42	"	"	"			"	I-4	
NA1053	"	43	"	"	"			"	J-8	
NA181-1	"	44	"	"	肩部			"	I-2	
NA 306	"	45	"	"	"			"	J-9	
NA 346	"	46	"	"	"			"	I-10	
NA 372	"	47	"	"	"			"	J-10	
NA 457	"	48	"	"	"			"	H-8	
NA1358	"	49	"	"	"			"	I-6	
NA 313	"	50	"	"	"			"	J-9	
NA 716	"	51	"	"	"			"	M-8	
NA1371	"	52	"	"	口縁部			"	D-2	
NA1535	"	53	"	"	"			"	1 住	
NA 409	"	54	"	"	"			"	G-5	
NA 999	"	55	"	"	肩部			"	H-7	
NA 564	"	56	"	"	口縁部			"	F-2	
NA765-1	"	57	"	"	肩部			"	L-7	
NA874-1	"	58	"	"	"			"	I-5	
NA874-2	"	59	"	"	"			"	I-5	
NA1363	"	60	"	"	"			"	E-2	
NA1345	"	61	"	"	口縁部			"	K-8	
NA1216	"	62	"	"	肩部			"	M-5	
NA 509	"	63	"	"	頸部			"	B-4	
NA1352	"	64	"	"	口縁部			"	M-9	
NA1363	"	65	"	"	頸部			"	E-2	
NA 466	"	66	"	"	肩部			"	D-2	
NA1042	"	67	"	"	口縁部			"	J-8	
NA391-3	"	68	"	"	肩部			"	F-4	

遺物（第31図、表7）

西ヶ原附近片桐の遺跡より表探した土器。第31図の1は大林遺跡の東端段丘寄の畠から昭和53年5月表探した山形文を施した押型文土器である。2は西原A地区20号トレンチより出土した楕円文を施した押型文土器である。3は西原C地区軌道西の桑園から表探した表裏に繩文が施された土器破片である。繩文は、L < Rである。部位は口縁部に近い破片と思われる。器厚は6mm。色調は褐色の胎土を含む。焼成は良好裏面に指痕がわずかに認められる。小破片であるため、創草期にある表裏繩文土器が急かに決めがたい。4～5は西原地区表探窓状器具による太い沈線文土器。6～11は繩文を施した壺形土器。12～13は隆帯で区画した間を窓状器で斜に施した深鉢形土器片。14は半截竹管で斜方向に施した土器。15～16は連続爪型文を施した中期中葉の土器。17は繩文土器。18～19は半截竹管文土器。20は結節繩文土器。21は繩文中期中葉に比定される土器片。22は繩文土器。以上の中期中葉以外の土器は曾利Ⅱ～Ⅲ式にかかる土器である。23～24は弥生式後期の土器である。

表7 西ヶ原附近出土土器

台帳No	図	図No	分類	器種	部位	材質	接合	時代・時期	備考
分 大林	31	1	繩文土器	壺形土器	頸部			繩文 早期	押型（出形文）
N Aトレンチ20	"	2	"	"	"			"	押型（楕円文）
N A西表探	"	3	"	"	"			繩文前期末か	
分 西ヶ原	"	4	"	"	頸部			繩文 中期	
"	"	5	"	"	"			"	
分丸④-408	"	6	"	"	口縁部			"	
分西ヶ原	"	7	"	"	頸部			"	
"	"	8	"	"	"			"	
"	"	9	"	"	"			"	
"	"	10	"	"	"			"	
分丸④-214	"	11	"	"	"			"	
"	"	12	"	"	"			"	
分 西ヶ原	"	13	"	"	"			"	
"	"	14	"	"	"			"	
"	"	15	"	"	"			"	
分丸④-308	"	16	"	"	"			"	
分桐山116	"	17	"	"	口縁部			"	
分丸④-380	"	18	"	"	"			"	
分 西ヶ原	"	19	"	"	"			"	
"	"	20	"	"	頸部			"	
"④-633	"	21	"	"	口縁部			"	
"④-214	"	22	"	"	頸部			"	
"①-26	"	23	弥生土器	"	"			弥生 後期	
分牧112	"	24	"	"	口縁部			"	

A 地区 1号住居址出土土器（32図）

1は、1号住居出土の壺形土器である。頸部に波状文その下部に斜走短線文があり、器面は鏡で整形したものである。2は、埋甕炉の土器である1の土器と同様の土器である。3は、無文の壺形土器。4、5は底部破片。5は台付の壺の底部と思われる。以上の土器は弥生後期後半の中島式の古い方に位置する土器である。

B 地区出土土器、陶器（32図）

7は1号住居址から出土した土師の壺である。色調は黄褐色、胎土中には砂粒を含んでいる。外面には粗い継方向のハケ目が施されている土器である。8はB-H-17より出土した土師の壺である。色調は黄褐色、胎土中に砂粒を含み焼成は良好。外面器体には粗い継方向のハケ目が施されている。

器内は口縁部に横に非常に疎なハケ目が施されている。9はIの15グリッドから出土した土師の壺である。色調は黄褐色、胎土に砂粒を含んでいる。外面は粗い継方向のハケ目が施文されている。

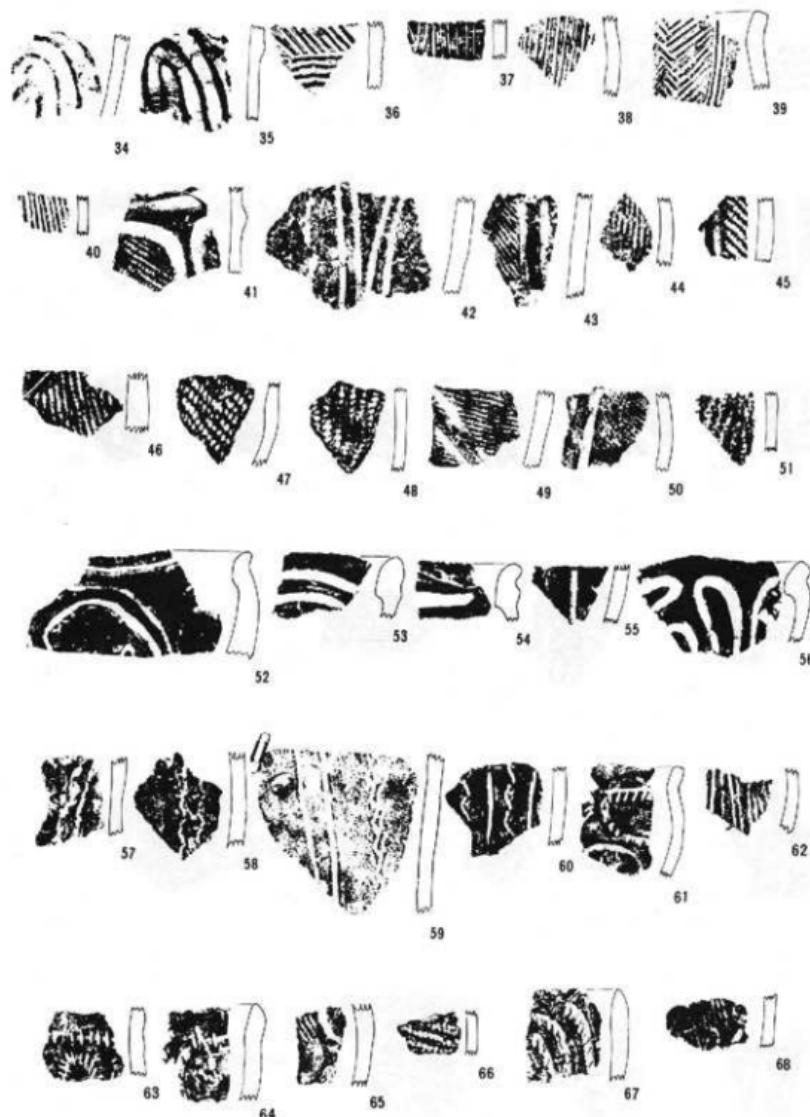
10は1号住居址から出土した土師の杯形内黒の土器である。胎土に砂粒を含む。底部はヘラ切による切り離によるもの。11は1号住居址出土の高台内杯形土師器である。時期は出土土器より奈良時代末から平安時代初頭にかけてのものと思われる。

B 地区 1号住居址出土土器、陶器（第33図）

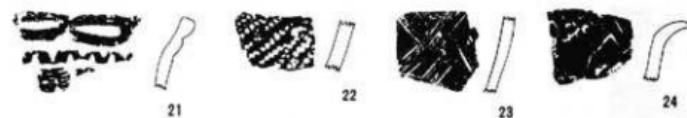
1は炉内出土の壺で、胎土には砂粒を含み赤褐色に焼かれている。縦積によるもので器面内外とも指頭の痕が明瞭に残る。最大径は胴部にあり28cmを測る。底部を欠く、口頸部はくの字に外反し肩の張りはなだらか。体部は橢葉状工具でハケ目が施されている。口唇内面にも疎なハケ目がみられる。2は胴部以下の壺形土器である。文様、胎土、色調すべて1と同様であるが、底部に体部の施文具と同じ器具で横位に施文している土器である。時代は奈良時代末のものと思われる。14は土師の内黒杯形土器である。胎土には砂粒を含んでいる。ロクロは左回転糸切底。15は土師の内黒杯形土器である。胎土には砂粒を含んでいる。ロクロは左回転糸切底。16は土師の内黒杯形土器、器は使用で荒れている。胎土は砂粒を含んでいる。ロクロ切離しの後ヘラ削が行われている。杯はすべて12・13と同時期のものと思われる。17は須恵器の底部である。底部は付高台自然釉が見受けられ、時代は奈良末～平安初頭と考えられる。18は住居址のフク土中より出土した灰釉陶器である。口径は15.5cm、高台の径は7.5cmその比率は2：1K90の中間時期、産地は尾北古窯と思われる。



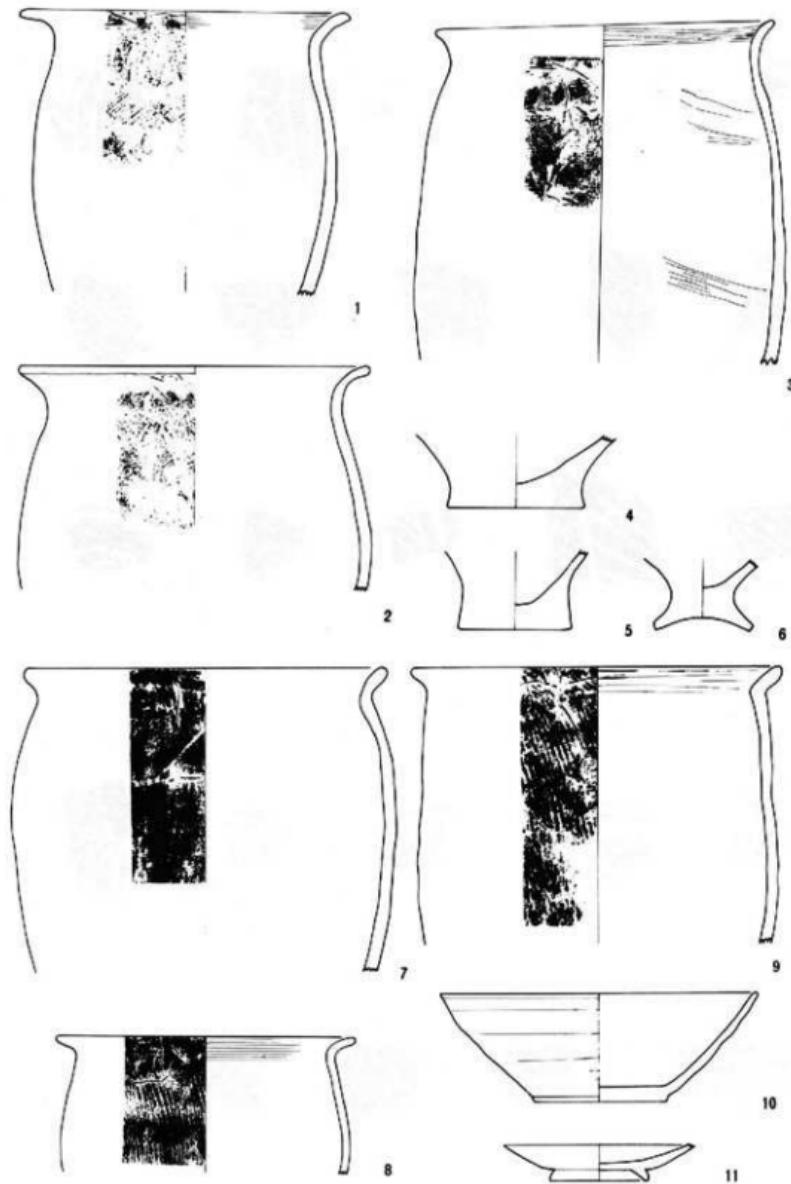
第29図 A地区木炭分布調査地区出土土器



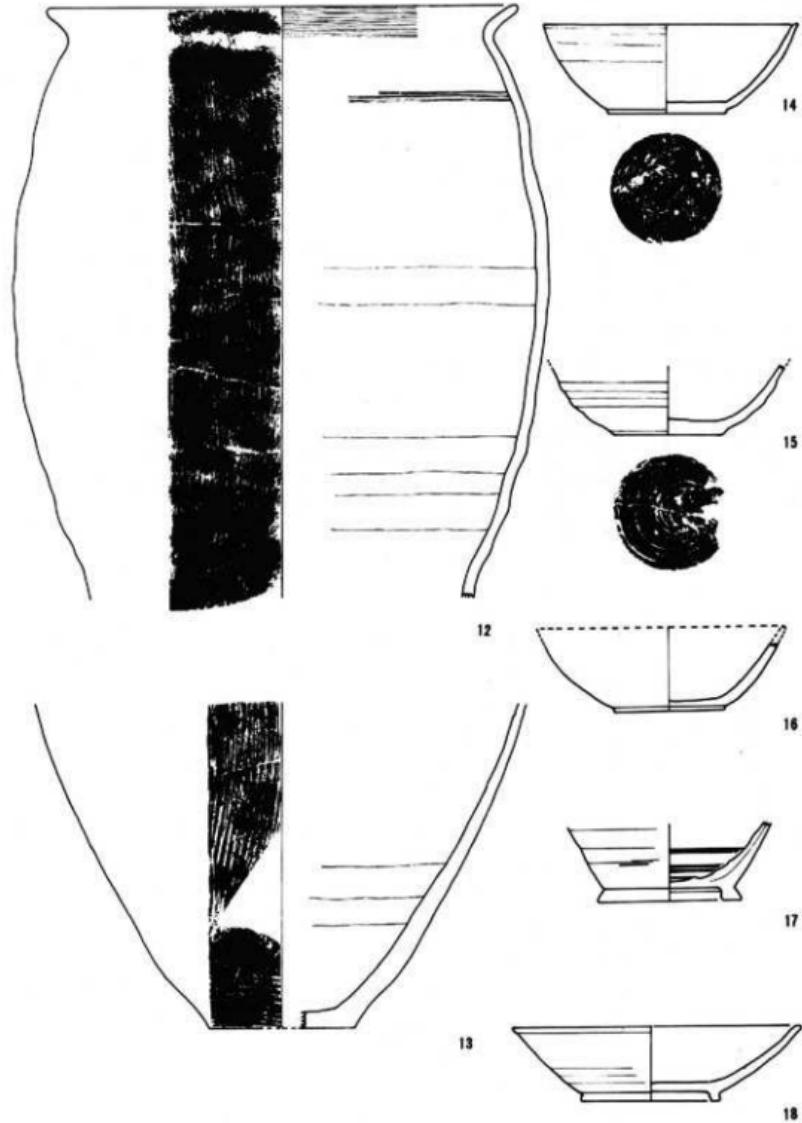
第30図 A地区出土繩文土器



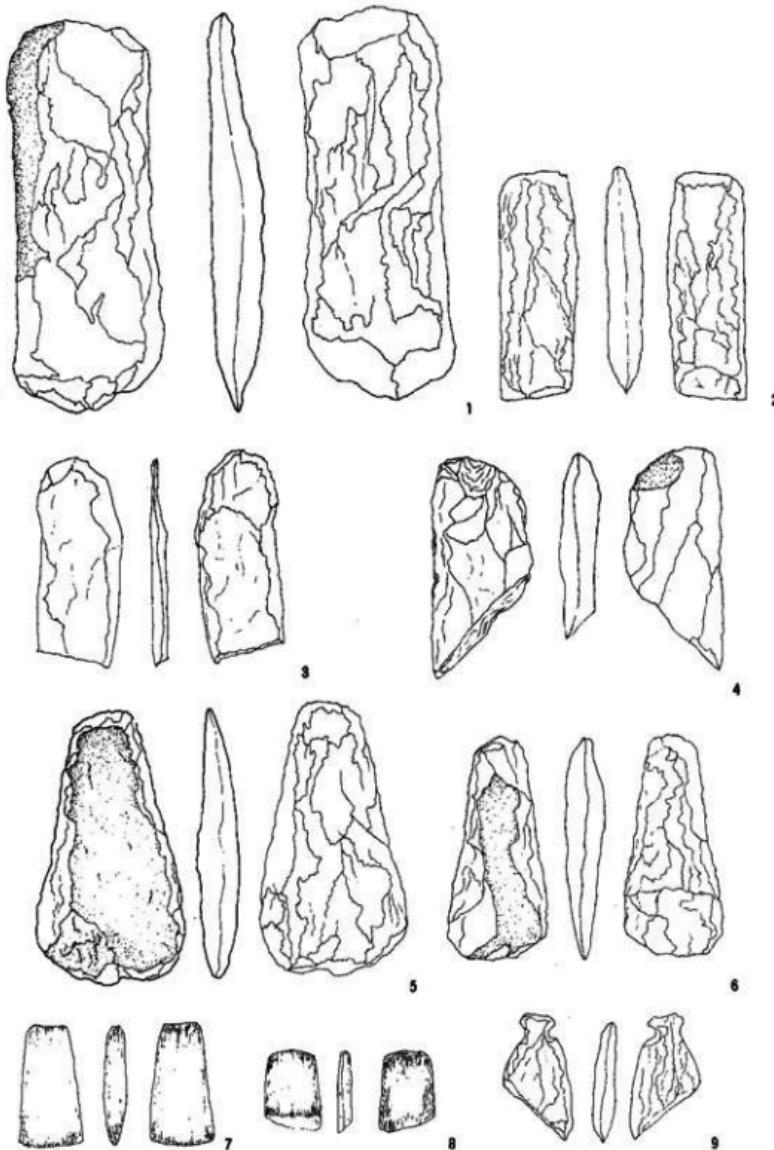
第31図 西ヶ原、周辺の遺跡分布調査土器



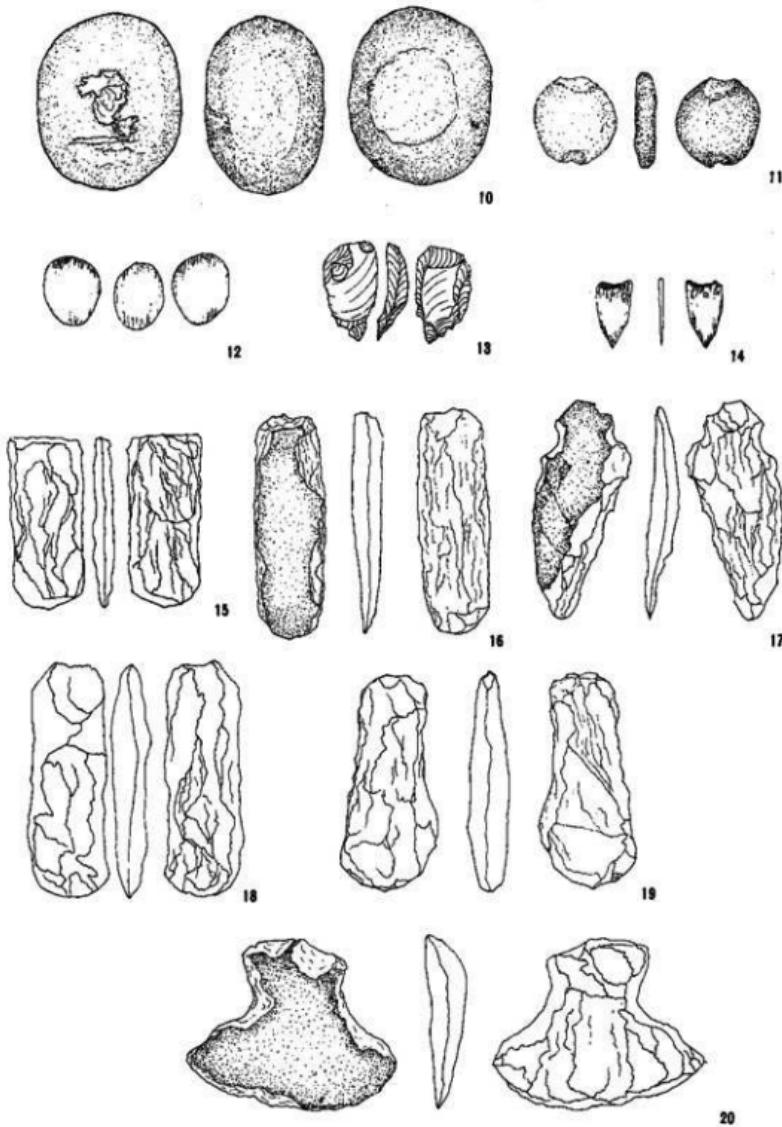
第32図 A・B地区1号住居址出土土器(1:3)



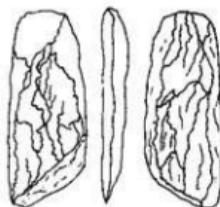
第33図 B地区1号住居址出土土器 (1 : 3)



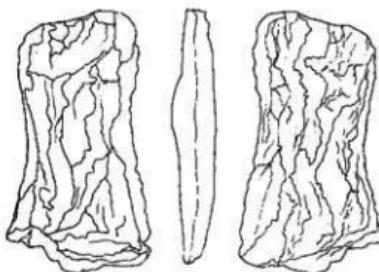
第34図 A・B地区出土石器 (1 : 3)



第35图 A·B地区出土石器 (1:3)



21



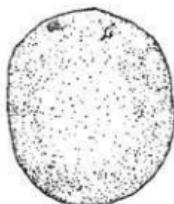
22



23



24



25

第36図 周辺の遺跡出土石器 (1 : 3)

資料 西ヶ原遺跡周辺の遺跡出土陶磁器一覧表

分類No	台帳No	図No	產地	器種	時代	備考	口絵
1	分中田島22	39	有田	青磁	江戸		四
2		"	青	磁	"		
3		瀬戸	はん	ど	"		
5		"			"	(欽陶) 四日市か京都	
8		"	天	目	室町～桃山		
9		"	徳	利	江戸		
11		"	小	皿	"		
13		"	平茶碗	?	室町		
14			茶碗	江戸			
16	N.B表	205	美濃	灰釉	鎌倉		二
17			瀬戸	めし茶碗	江戸	磁器	
19		"		小形こねばち	"		
20		"		皿	"	すり絵	
21		"		めし茶碗	"	磁粉	
24		"		蓋	"	陶製 どびんかきゅうすの蓋	
25			御深井	御深井の碗	"		
26	分中田島37	34	瀬戸	仏花器	室町	尊式仏花瓶のラッパ口	三
27			外・志野 内・灰釉	江戸		染め分の鉢	
30			どびん		"		
32	分中田島2	36	瀬戸		"	灰釉	三
35	分中田島5	37	"	すり鉢	"		四
38		"	はん	ど	"		
39		"	ど	びん	"		
40		"	湯	のみ	"	濁紙	
42		"	灯	明皿	"		
43		"		"	"		
45		"	鉄釉	花たて	"		
48		"	鉄釉	大鉢	"		
50		"	灯	明皿	"		
51	分中田島21	38	"	"	"	灰釉	四
52	分中田島52	31	"	瓶あるいは四耳壺	鎌倉～室町	灰釉	三
55	分中田島55	32	"	盤(こね鉢)	室町		三
56		"	どびん	の蓋	桃山		
57		"	山	茶碗	鎌倉	鎌倉の中頃	
59	分中田島59	33	"	すり鉢	室町		
61		"	こね鉢	江戸			
62		"	田舎茶碗	"	吳須		三

分類No	台帳No	図No	産地	器種	時代	備考	口絵
63			瀬戸	すり鉢	室町		
64			〃	鉄釉花たて?	〃	45番と同じ	
67	分中田島67	40	〃	鉢	江戸	吳須	四
68			〃	皿	〃	灰釉	
69			〃	碗	〃		
70			〃	〃	〃	鉄釉	
75			〃	こね鉢	〃		
76			〃	仏飯器	〃		
79	分牧ヶ原5	48	〃	すり鉢	?	志野風の釉	四
85			〃	すり鉢	江戸	すり目が細かい	
86			?	碗		磁器	
87			瀬戸	乳針	江戸後期	磁器、磁製乳鉢	
88			万古	?	江戸?	三重県	
89	分牧ヶ原15	44	瀬戸	どびんの口	江戸		四
93			〃	天目茶碗	桃山		
94			〃	どびん	江戸		
95	分牧ヶ原21	43	〃	天目	桃山		四
96			〃	筒形	江戸	鉄釉	
98			有田	?	〃		
101			瀬戸	菖湯のみ	〃		
103			瀬戸	?	〃	仏飯器?	
104			〃	水壺	〃	るす釉(銅を使用)高級品	
105			〃	珍味入れ	〃		
106			瀬戸	湯のみ	〃		
107			瀬戸	?	?	飛鉢	
108	分牧ヶ原34	47	中國	青磁	室町(末)		四
109	分牧ヶ原35	42	瀬戸	すり鉢	~桃山		四
110			〃	大形鉢	江戸	鉄分を多く含粘土	
111			〃	小形鉢	〃		
112			〃	灯明皿	〃		
113	分牧ヶ原39	46	〃	白釉	〃		四
115			〃	鉢	〃		
116			〃	碗	〃	鉄釉	
117			〃	?	〃	吳須	
118			〃	?	〃		
119			〃	すり鉢	〃		
120			〃	?	〃		

分類No	台 機 No	図No	産 地	器 種	時 代	備 考	口絵
121			瀬 戸	徳 利	江戸末～明治		
122	分牧ヶ原A	41	"	瓶子 盤の肩	鎌倉～室町	磁 器	四
123			"	四耳 盤の肩	鎌 倉		
124			"	す り 鉢	江 戸		
125			"	ど び ん	"		
126			"	片 口 の 蓋	江戸後期	しょう油さしのようなものの蓋	
127			?	染付の小鉢	江戸～明治	磁 器	
128			瀬 戸	鉢	江 戸		
129	分牧ヶ原55	45	"	大 鉢	"		四
130			"	天 目	"		
131			"	ど び ん	"		
132			"	す り 鉢	江戸初期		
133			"	菊 文 盆	桃 山	室町末～	
135			"	青 磁	江戸末～明治		
138			"	脚 付 鉢	室 町	123と同年代	
140	NA 667	1	中 国	青 磁		中国製	一
143			瀬 戸			119と同年代	
144			"	徳 利	江 戸		
145			"				
148			"	鉄 菓 碗	江 戸		
149	NA 889	6	美濃	皿	桃 山		一
150			瀬 戸	万十むし?	江 戸		
151	NA 326	7	"	万十むし	"		一
152			"	ど び ん	"		
153			"	ど び ん 蓋	"		
154	NA 1098	8	"	す り 鉢	"		一
155			"	湯 の み	"		
156			"	筒 形 碗	"		
157			美濃	志 野			
158	NA 25	12	瀬 戸		江戸(末期)	磁製品	一
159			"	碗 蓋	明 治	加藤作助の先々代(春逸)	
160			有 田	直 明 盆	江 戸	磁器染付	
161			瀬 戸	灯	"		
162			"	"	"		
163			?	皿		磁 器	
164			有 田				
165						161と同一器種	

分類No	台帳No	図No	産地	器種	時代	備考	口給
166			有田	染付の皿	江戸		
167	NA 139	11			"		一
168			瀬戸	小形味噌入	"		
169			"	大型石皿	"		
170		10	"	灰釉	"		
171			?				
172	NB 92	28	瀬戸	鉢	江戸	染め分け	三
173	NB 93	29	"	青磁子	"		三
174	NB 223	17	"	瓶	鎌倉		二
175			"	子	"	灰釉があったもの	
176			"	磁壺	"		
177			"	こね棒	室町		
178	NB 110	25	"	こね鉢	"		三
179		26	美濃	天目	室町(末期)		三
180			瀬戸	水さし	桃山		
181	NB 371	27	"	皿	"	あめ釉	三
182	NB 175	18	"		江戸	あめ釉	二
183			"		"	鉄釉	
184			"	灯明皿	"		
185			"	片口の蓋		しょう油つぎの蓋	
186			"	針		鉄釉	
187	NB 376	19	"	すり鉢	室町(前期)		二
188			"	葉茶壺の耳	江戸		
189			"	湯のみ	"	灰釉	
190			"	菊文壺	桃山		
191			"	壺	江戸		
192			"	皿	"	呉須	
193				不湯のみ	江戸		
194			瀬戸	明み		陶製	
195					"		
196			瀬戸	湯のみ	"	陶製	
197			"	田舎茶碗	"	陶製 呉須繪	
198			"	めし茶碗		磁器の初期	
199			"	めし茶碗	江戸	磁器	
200			中國	青磁	南北朝	軌道下	
201	NB表	13	美濃	須恵器	平安		二
202	NB表	15	"	灰釉	"		二

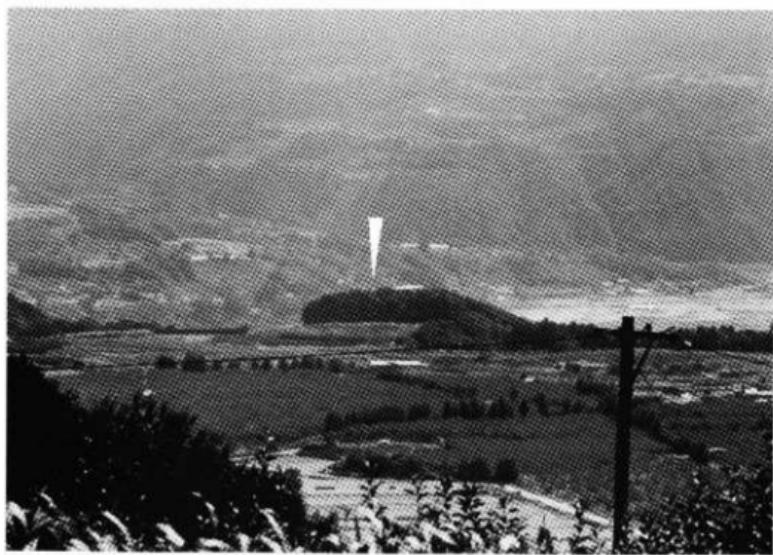
分類No	台帳No	図No	産地	器種	時代	備考	口論
203	NB 211	14	美濃	灰 軸 鉢	平 安		二
204	NB 表	22	瀬戸	鉄 軸 鉢	室 錦	町 倉	二
205	"	16	美濃	灰 軸 鉢	室 錦	町	二
206	"	24	瀬戸	鉄 軸 鉢	室		二
207	"	21	"	す り 鉢	"		二
208	"	23	"	灰 軸 鉢	"		二
209	"	20	"	鉄 軸 鉢	"		二
210			江 戸	"	瀬 戸		
211		"			"		
212		"		灰 軸 盒	"		
213		"		" (?)	"		
214	NC 表	30	中 国	青 磁 目	南 北 朝	軌道下から発見	三
215	NA表採	2	瀬 戸	天 目	室	町	一
216	NA 23	5	"	灰 軸 鉢	桃 山		一
217	NA表採	3	"	"	室	町	一
218	NA 表	9	"	"	江 戸		一
219	NA 1066	4	"	天 目	室		一

資料 図 版

図版 1



遺跡遠景（東側より）

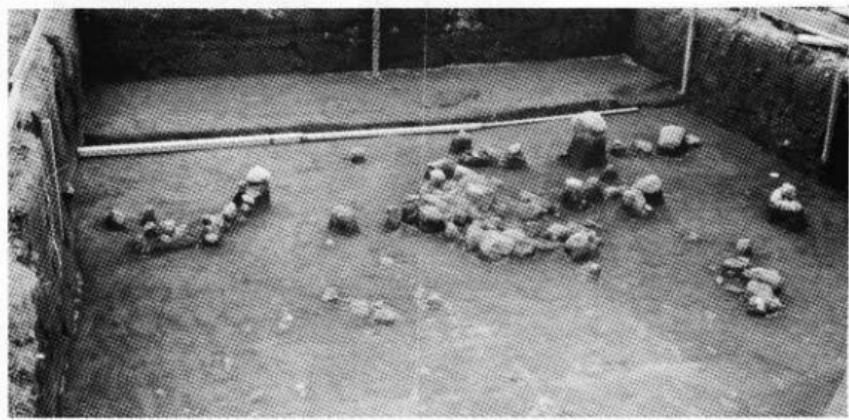


遺跡遠景（西側より）

図版 2



木炭調査地区に現われた焼石（上から）

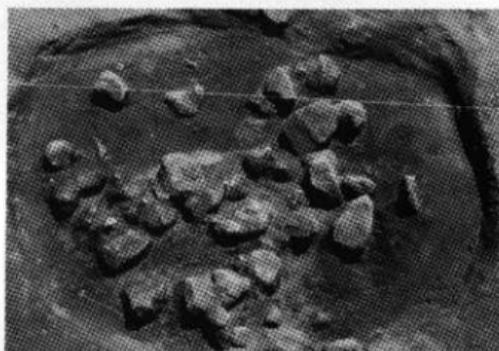


同 上（南側より）

图版 3



木炭分布調査状況



焼石炉上部

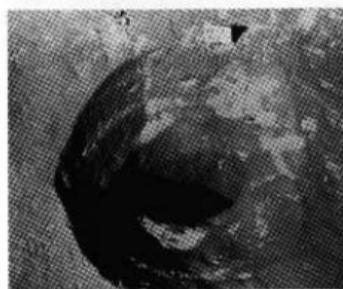


焼石炉底部

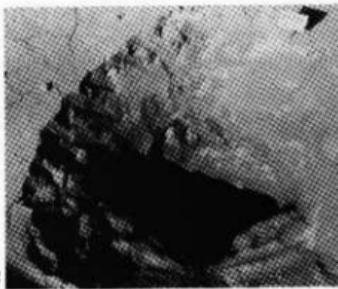
図版 4



A地区 1号住居址



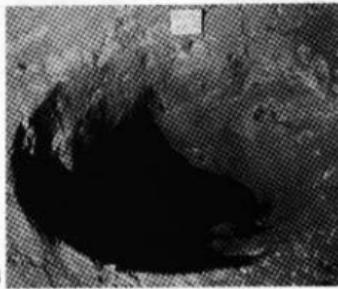
P 1



P 2



P 3



P 4

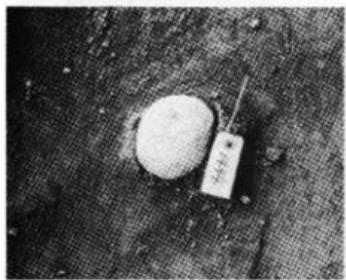
图版 5



埋窑炉



土器出土状况



石器出土状况



土器出土状况



B地区全景

図版 6



B地区 1号住居址



同カマド

図版 7



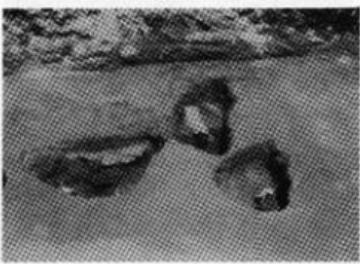
カマド断面図



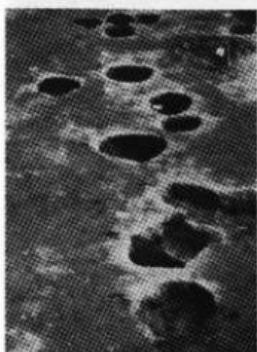
カマド内土器出土状態



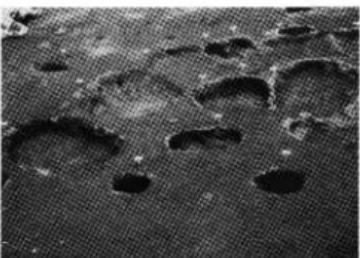
↑カマド横ビット内出土土器



ビット内土器出土状態



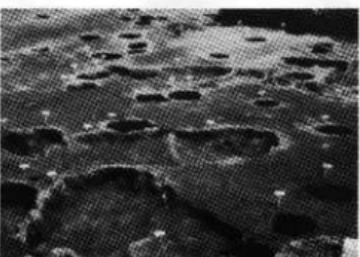
柱穴址(部分)



柱穴址(部分)

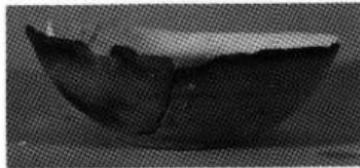
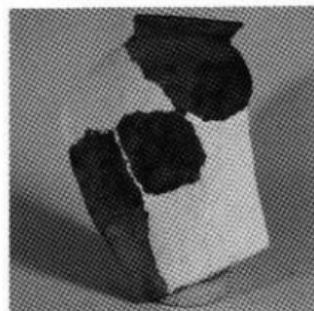
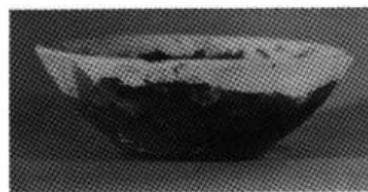
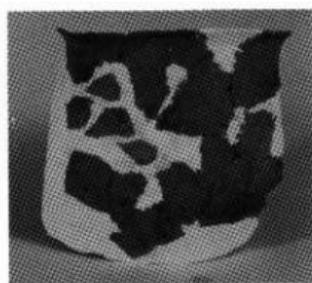


土壤(部分)



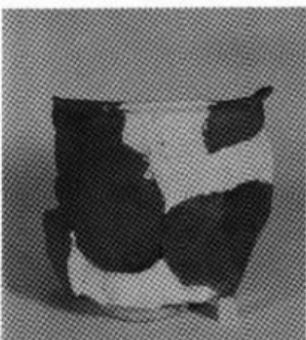
土壤柱穴址(部分)

図版 8



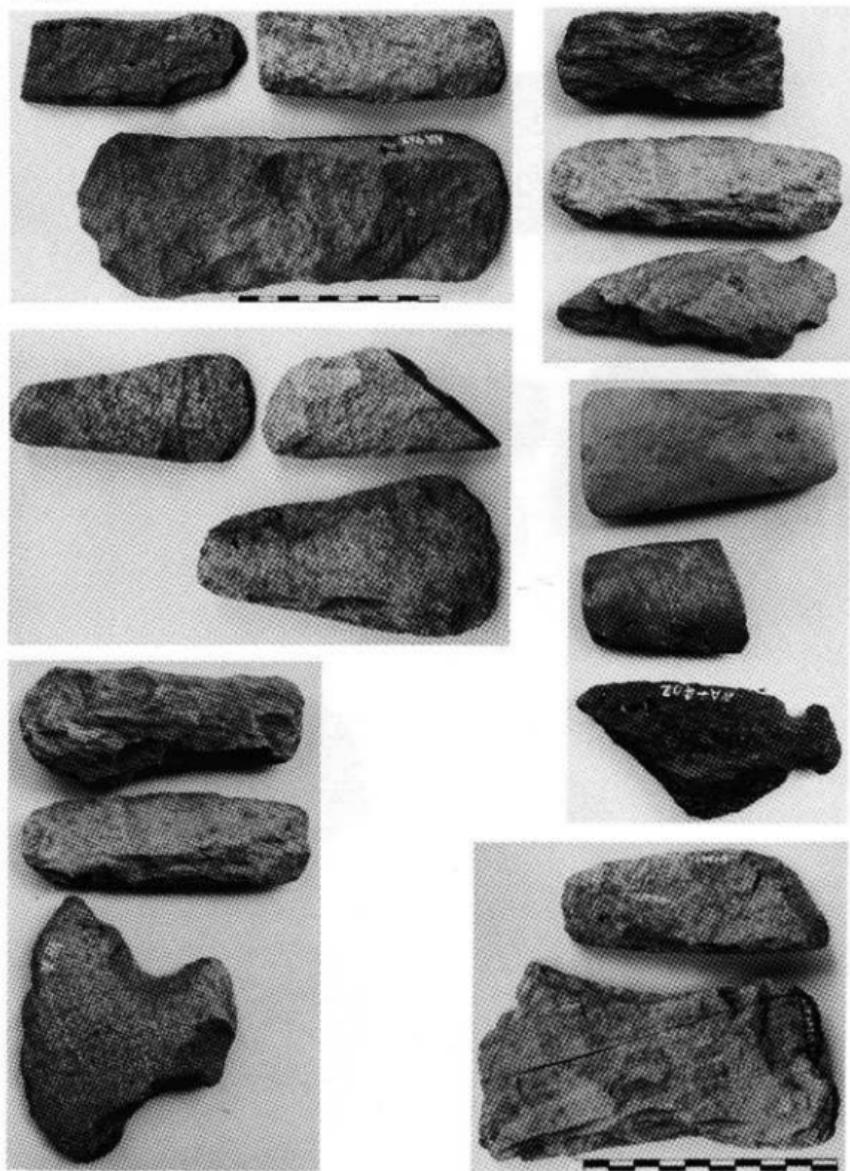
A B 1号住居址出土土器

圖版 9



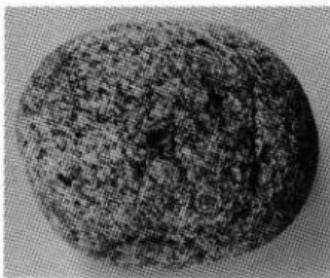
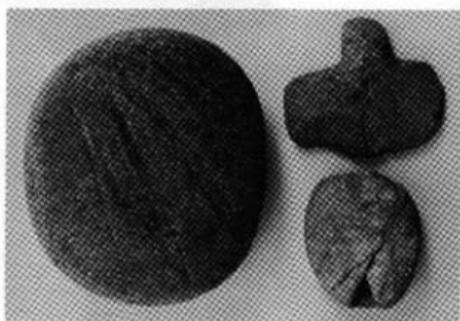
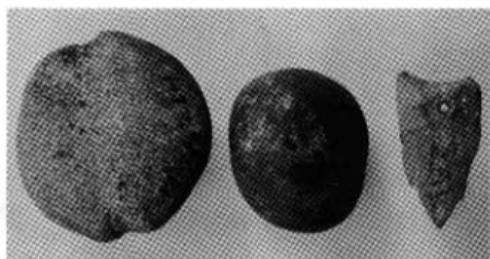
B 地区 1 号住居址出土土器

図版10



周辺の遺跡出土石器(1)

図版11



西ヶ原周辺の遺跡出土石器（II）